

「一晩のうちに悪い心に變つたかなどとお云ひになるのはあなたが
さうでいらつしやるから出たお言葉でせうねえ。」
女王は少し微笑んだ。

「揚足をさるのはおよしよ。私等はその様な幼稚な戀を仕合つての
ぢやないでせう。けれどあなたは悪氣がないから好い。私がね今
ごんな云ひ譯をしても實際あなたには濟まないのだから私は云ひ
譯をしないだけだ。あなたは世の中と云ふものがよく分らないか
ら仕方がないがね私の身になつて御覽自分の身體に心の命じる通
りの行動をさせてそれで濟んで行かないのだよ。唯一つね私の自
ら慰めて居るのは陛下が私のためにお望みになるやうな日が來た
時に、あなたに志を見せることです。ごんなこととは今から何も云
へないけれど。」

宮がこんなことを云つておいでになつた時に六條院へ行つた家來が

歸つて來た。先方の贈物の華美やかな衣服が肩に懸けられて居るか
ら婚禮の翌日の文使をこの男がしたことが誰の目にも合點された。
使に氣が附いた時何時の間に手紙をお書きになつたのであらうと女
王も思つた。返事は繼母の宮がお書きになつたものであつた。宮は
御自身で料理を撰んで持つて來させたり、態態作らせたりして女王に
少しでも食事をさせようとおしになつたが、お骨折がひもなかつた。
夕方になると宮は正殿の方へお行きになつた。日ぐらしの鳴く聲を
聞いても女王は山莊暮しが戀しくてならないのであつた。今夜はま
だ宵の口に宮は六條院へおいでになるのであつた。宮の先拂ひの聲
が遠くなつて行くに随つて女王は涙に身體が浸かつて行くやうな氣
がさせられた。匂の宮の三日の大禮のある日は朝から中宮が御病氣
におなりになつたと云ふことで、お身内の人は皆御所へ集つて行つた
が、お風邪で大したことがないと分つたので左大臣は晝頃に歸らうと

したが薫の君を一緒に車に載せて行つた。六の君が人の妻になつたのを残念がる様子もなしに、今夜の準備に氣を配る左大臣をかひがひしく助けて働いたりするから、夕霧の君は少し憎いやうな氣がしないでもなかつた。饗宴が果てて歸る時、自身の供男の一人が、

「ああ、自家の殿様は何故此方の婿におなりにならなかつたかなあ。何と思つてつまらないやもめ暮しをお廢めにならないのかなあ。」

と中門の外、暗がり、云つて居たのが耳に入つたから、薫の君は笑止く思つた。この男は匂の宮のお附きの者一同が、下下に至る迄目の眩む程の被け物に逢つて居るのを羨しく思つたのであらう。家へ歸つて居間へ入つた時、薫の君は今夜見て來た晴晴しい式のことを思ひ出して、あゝした結婚をするのは厭なことであると思つた。然しその席での宮の御態度は飽くまで美事なものであつたなごとも思つた。自

分でも若し娘の父であつたなら、陛下の後宮へ入れることを望むよりもあの宮の夫人にさせることを願ふであらうとも思つた。これ迄宮に縁組させることを思つて居た娘の親達、今では自分を婿にしようと思つたばかりして居る、自分のやうな老人見たやうな男を何うしてそんなに思へるのかしらと思つた時、薫の君は誇らしい微笑が浮んだ。陛下が女二の宮のことを仰せ出しになる時になつても、自分のこんなにかになつて居る心を改めることが出来なかつたなら困つたものであると思つた。陛下の内親王を頂くことが名譽なことであつても、内心から何等の要求もなく、妻を持つ程、愚しいことはないが、併し女二の宮があげまきの君に似た方でありになつたなら嬉しいであらうと云ふ氣もした。到底眠られないと思つた薫の君は、按察の君と云つて、外の女よりは少し濃い愛を懸けて居る女の部屋へ行つて、其晩は寢た。どんなに朝寢をして居ても人目に立つと云ふのでもないのに、薫の君

は暗いうちに起きて出ようとした。

「浅い戀のやうだけれど、その代り一生絶える戀ぢやないのだから好

いだらう。」

と男は云つた。

「此の景色が面白いから見て御覽よ。」

なごとも云ひ残して行つた。句の宮は晝間お見になつてから六の君をお愛しになる心が一層深くなつた。血色の好い花やかな顔で、目附の艶な美人であつた。才のある事は言葉附に現はれて見えた。親の身ではこれ以上の女が人間界にあると思へないであらうが、和味や愛嬌のある事は二條院の女王が勝つて居ると宮は思つておいでになつた。綺麗な若い女達が三十人、女の童六人が附けられてあつた。雲井の雁の君が生んだ大姫様を東宮の女御に出した時よりも、左大臣は今度の姫様の結婚仕度の方を幾倍か力を入れて華美やかにさせた。

句の宮の負ふておいでになる興望などの大きいせいもあるのであらう。軽くないお身であるから三日の大禮の濟んだ後の句の宮は六條院でお住みにならなければならぬことに自然なつてしまつた。南御殿の一部を表のお居間にして宮は其處に晝の間はおいでになるのであつた。二條院へお行きになることも出来にくくなつて、女王は宮のお歸りの絶間を待ち遠に思ふ日が来た。山莊を出た時の自分の心は狂ふて居たのであらうか、こんな分りやすい近い未來のことも見えなかつたなごと思つて、女王は悲しがつた。ごうかして宇治へ行きたいとばかり思はれる。自分は唯ださうして暫く安静な心になつて見たいと思ふだけで、永久に宮とお別れしようとするのではないから、悪いことではないであらうとかうも思ふのであるが、女王は考に餘つて、薫の君に手紙を書いた。来て貰つて相談をしようとしたのである。去りし日の佛事につきての厚き御心入れは阿闍梨よりの文にて承

知至しまるらせ候。誠になほ御心の端に昔のこと留め置かせ給ふ故とかたじけなく嬉しく思はれ申し候。御禮はお目もじのせつ自ら申し上ぐべく候。かしこ。

平生は此方から送る手紙にも返事をはかばかしく書いて遣さない人が、お目もじの時とか自ら云はうとか云つて来たのが珍しくて嬉しくて薫の君は手紙を何度も何度も讀んだ。返事を書いて返して、自身は翌日の夕方に二條院へ行つた。薫の君は女王に戀をして居る心がある。自身でも顯はに感じられるのであつた。戀人に見られるのであると思つて、著る著物を選つたり、それに薫物を殊更多くたきしめたりすることをして家を出たのである。女王もあの暗かつた昔の夜のことををりをりは思ひ出さぬこともないのであるから、この人の誠實な人であることも情の深いことも良人の宮とは多く違ひのあるのがよく分つて居て、中納言の妻になつて居たならこんな苦勞もしないわけであ

(1302)

つたと位は思つたことがあるかも知れない。今日は坐敷の中に入れて居間の御簾に几帳を添へて立てたその少し奥の方に女王は坐つて客に逢つた。

「お招き下さつたのちやありませんが、お手紙を頂戴した喜びに私は直ぐにも参りたかつたのですが、昨日は宮様がお歸りになつていらつしやると聞いたものですから今日にしました。今日は嬉しいです。かうして内輪の者らしくしてお逢ひ下さるのですから。」

と薫の君は云つた。女王は恥しく思つて返辭に困つたやうであつた。「宇治で法事をおさせ下さいましたことをごんなに嬉しく思つたか知れないので御坐いますよ。これをまた何時ものやうに黙つたまま居ましては恩を感じない人間だと思ひになるかと思ひましたから。」

かう云ふのであらうがよく聞きとれない。

(1303)

「餘りお聲が遠いではありませんか。」

と薫の君が云つたので、女王は御簾の方へ少し出て来た。この刹那に男は息苦しいやうな感じをした。それを去氣ない風にして薫の君は宮がこんなお心におなりになると云ふのは以外である、自分は宮を誤解して居たと態と悪くお云ひもしたり、女王の慰みになるやうに云つたりもして居た。女王は宮のことはお云ひすることが出来ないから、唯だ世の中と云ふものが自分には厭はしく煩はしくばかり思はれるからと云ふやうに云つて、この人の手で宇治の山莊へ歸つて行くことを果させて欲しいと思ひ入つた風に頼むのであつた。

「併しそれは私の一存で計ふことが出来ませんよ。宮様に軽く一寸した風にお願ひになつて、それでお許しが出ましたなら少しは長くお出でになつて居ても好いと思ひます。さうでないとお二人の間がそんなことが原で氣まづくなつたりすることがあるかも知れま

せん。あなた御自身が誤解を招くことのないやうにさへしてお置きになることが出来ましたら、お送り迎へのことなんかなんでもないことですから私が皆します。私がすれば宮様も幾分安心もされるでせう。」

と薫の君は云つて居たが、あげまきの君の言葉を用ゐないで女王を宮に嫁がせてしまつたことで自分は後悔の苦い涙を流しぬいて居る、自分はこの悪夢を破つて意義のある生きやうをしたいと思ふのであるとこんなこともほのめかすのであつた。それに暗くなつてもまだ薫の君は歸らうとしないのであつたから女王は困つて居た。

「またその内お目に懸ります。加減も少しわるいのですから失禮いたします。」

と云つて女王が奥へ行かうとするので薫の君は引き留めたいために「それでは宇治へは何時頃おいでになりますか。少しは今から彼方

の方でも用意をさせて置きたいのですから。」
と云つた。女王は思ひがけない嬉しいことを聞かされたと思つた。
「來月の初め頃にと思つて居ますの、そつとしてすれば好いと思ひま
すわ。許しなごなくつても私思ひますの。」
愛らしい聲が昔の人のやうに思はれる薫の君は、思はずもたれて居た
柱の横から御簾の中に手をやつて女王の袖をとらへた。不意のこと
に驚いた女王は物も云はれない唯力を入れて袖を引いて奥へ行かう
とばかりした。それに附いて男は御簾の中へ身體の半分を入れて横
に寝た。

(1306)

「そつとしてすれば好いとは私の心を察して云つて下すつたことで
すか。私をあなたはお疎みになる理由はないはずですね。」
「あなたは随分ですわ。女達が見ます。私はどうすればいいでせう。
あさましいことですわ、あなた。」

女は泣き出しさうになつて居た。

「あなたの云ふことはもつともなやうでもありますが、何もそんなに
悪いことをして居るのぢやありませんよ。この位のことには昔のあ
る晩と一緒にではありませんか、姉さんはあなたを私の妻にするのを
お許しになつたのです。それなのにあなたは私をお悪みになるの
ですか。私は無法なことをする人間ぢやありませんから、それだけ
は安心して居て下さい。」

かうは云ひながら長い間潜んで居た戀の火が一時に心から噴き出す
やうで苦しくてならない男は、この人を思つて居る心をごとく云
ひ並べて聞かさうとした。許し難く女を思つて居ることもその様子
に見えた。女は泣いた。男も泣いて居る。昔よりも美しいこと、
猶勝つて見えるこの人を自身の心から人の妻にさせたと思ふ口惜涙
である。近い處に女達が二人居たが見ぬ風をしてそつと出て行つた。

(1307)

くはしいことはよう書かない。昔でさへもこんな場合に思ひやり深い人だつた薫の君は縦なことの出来なかつたのももつともなことである。終ひには思ひ返して外へ出た。まだ宵の口であると思つて居たのが何時の間にか曉方近くなつて居た。著物の上から蝶結びにした腸帯を締めて居ることを自分に見られることが女王は恥しくてならない風であつた女が妊娠をして居ると云ふ驚きに止みがたい欲も押へつけられたのであるとも思ひ、自分は云ひがひない性質であるからとも思つて家に歸つた薫の君は悶えて居た。併しながら女を動かすことが出来て戀の成立つた時其處にまた二人はどんな苦を味はなければならぬか知れない、自分も苦しいであらうが、女がさまざまに惱むのを見ては自分は立ても居ても溜らぬ程悲しい思ひもするのであらうと思ふとこの戀は諦めねばならないと理性では思へるのであるが、その人を得られずに自分は暫くでも生きて居られるであらうかと危

く思はれる程戀しいのであつた。外の事は一切心から除かれて薫の君は二條院の女王のことばかりを思ふ人になつて行くやうである。宇治へ行ききたがつて居るのであるからさうさせた方が自分のために都合がいいであらうかとも思ふが宮のお許しにならないことは分り切つて居るからそれはしようがない、どうすれば世間體もよく自分の戀の満足も得ることが出来るであらうと薫の君はさまざまに思はれるのであつた。女王に手紙を送つたが體裁だけは何時ものやうな立文でやつた。

わけつる路は悲しくも、

唯しらす露のしげかりき。

秋のあはれはひとしきを、

昔の空のしのぼるる。

ことわりを離れし涙にむせび君を恨めしと思ひ候ふ心よ文字にも

盡しがたく候。

とあつた。今日に限つて返事を書かないのも女達に怪しく思はれる
ことであらうと思つて、

承り候。今日はいとこちろ惱しく候ふて御返しつづりがたく候。
御許し下され度く候。

と書いて遣つた。見るのを樂みに思つた手紙がこんな短いものであ
つたのに失望した薫の君は、目の前に現はれる幻の國で昨夜の人を飽
く迄見ようとして居た。あさましがつては居ながら懐しい風に優し
く自分をあつかつた事など計りが思はれる。宮の御愛情がさめてし
まつた時女王の頼みにするのは自分以外にはないことになる、さうか
と云つて自分はその時公然に女王と夫婦になることは出来ないであ
らうが、たとへ情人であつても心では唯一の妻と女王を見て居たい、な
どとこんな事を思ふ程夢中な心に薫の君はなつて居た。死んだ人を

思ふことは唯悲しいばかりで、どうすれば好いかと思ふこんな苦し
みは附いて来ないことが思はれた。今日は二條院へ宮が来ておいでに
なると家來の云つて居るのを聞いても女王のために今迄の兄弟のや
うな喜びは起らないで、胸がいつばいになるほど羨しくも妬しくも思
はれた。宮は自身の心でありながら女王とかうして離れて居ること
の出来るのをあさましい情ないことであるとお思ひになつて俄に戀
しくおなりになつて歸つておいでになつたのである。女王は宇治へ
歸らうとしても自分の頼みにする薫の君はやはり自分のためには苦
しい人であることが知れたのであるから、自分のやうな薄命な女はこ
の世に居る間はどんな事にも辛抱をせねばならない、さうして人にも
憎まれないうで居るのがいい恨んで居るやうには見られないで居よう
と思ふやうになつた。腹部が少しふくらんで腰にしるしの帯の結ば
れた姿を懐しく思つて宮は見えておいでになつた。何事もきらきらし

い六條院に居るとは違つたうち解けたお心持にもなれるのであつた。宮はまた女王に戀の變らないことを繰返してお語りになるのであつたが、今日は少し身に入れて女王も聞いた。自分に飽くまで油断をさせて置いた後でああした困つたことを云ひ掛けに入つて来た昨夜の人を思ふと、やはり頼みになるのは良人の外にはない、久しい間お歸りにならない事があつたなら恐ろしい事がまた起らないにも限らないと、かう思ふのであるから、今迄よりは宮の意をお迎へする氣にもなつて居た。まつはすやうにするのが可愛くてならなくお思ひになる宮は、ふと女王の著物に薫の君の匂ひのするのに氣がお附きになつた。その道の人であるからお心にあるものが閃めいた。源中納言が留守中に来たかと云ふこと、近い處へ招んで逢つたかと云ふこと、それから後中納言がごんなことをしやうとしたかと云ふことを宮は問ひ出さうとお懸りになつた。宮が想像してお云でになることと昨日の事實

とはさう遠くないのが苦しくて、女王は返辭か出来ない。女王の困り切つた顔色をじつと宮は御覽になつた。あの人が女王を戀しく思はない筈はないとは前から自分は思つて居たことなのであるが、やつぱりさうだつたのか、自分は戀を横から盗まれたのかとお心が騒いだ。昨夜の著物は著更へたのであつたが、實際薫の君の匂ひは女の身體を包んで居るにも移つて居た。宮は二人がもうある障壁を越えた戀をしたものとして聞き辛い言葉でお責めになるのを、女王は唯苦しく思つて聞いて居るだけであつた。

「私はあなたをどれ程愛して居るか、あなたの將來の位置をどんなにして見ようと思つて居るか、あなたにはそんなことが分らないのだね、良人がもう一人妻を持つたと云つて女も同じやうに外の男と戀をするやうなことをするのは、それは身分のない者のすることだよ。あなたを私は見違へた。そんな人ぢやないと思つて居た。」

こんな云つて、何とか女王の答へるのを見ようとお思ひになるのに、一言も云はないで俯向いたままで女王の居ることは、一層嫉妬の焰を宮にお燃せさせることになつた。

「男の移り香の染んで居る人が戀しいのか私は馬鹿だね。」とお云ひになつた。

「思ひ合つて居る夫婦だと思つて居ましたのも夢なんですわねえ、かうして私は捨てられてしまふのでせうね。」

わつと聲を立てて女王は泣いた。その容子の美しくさがしみみお感じられになるにつけて、かうであるから中納言が邪な戀の心も持つやうになつたのである。いよいよ妬しさがお覺えられになつて、御自身もまたほろほろと涙を零して泣いておいでになつた。どんな罪のある人であつても自分はこの人と到底別れることは出来ないとかうお思ひになるから責めておいでになる一方では宥めもされるのであ

つた。翌日も宮は二條院においでになつた。女達の中に少し著古した著物を著た女の交つたりして居るのが六條院に比べて趣きのあることのやうに宮は見えておいでになつた。女王は薄紫を重ねて著た上に紅い上着をしごけない風に著て居た。粧ひを盡した六の君にこれで居て劣つたやうに思はれないこの人は宮のお持ちになる深い愛情にふさはしいだけの勝れた美しい人に違ひない。好い程に肉の附いた人であつたのが少し細くなつて、色がますます白くなつたから氣品が多く添つたやうでもあつた。戀しく女王をお思はれになるにつけて、兄弟でもない異性の若い人か近しくこの人と交際つて居て聲を聞いたり、けはひが分つたりしては、どうして戀しくならずに居られよう、と宮は御自身の心にひき比べてお考へになつて、この真相の知れるやうな手紙がないかと、女王の使ふ棚や小箱の中をそれとなくお捜しになつたが、そんなものもない。時候見舞だの、用事だの書いた短

い手紙が少し外のものに交つてあるだけであつた。こんな筈がないとお疑はれになる。中納言はごんな男かと云へば趣味の人で女の目には戀しかりさうな瀟洒な姿を持って居る、あの男から戀を明した時女王も同じ心を持つやうになることは想像が出来、戀人になるのに似合つた同志であるからとお思はれになるのが宮はお腹立しいのであつた。今夜もまたお泊りになることになつた。宮は一日のうちに二度も手紙を六條院へ持たせてやつたおいでになつた。薫の君は宮がかうして二條院に籠つておいでになる事を聞いて味氣な心にもなつたのを、そんな思ひをするのは自分の心がよくないのである、これこそ女王のために安心も出来るのである、喜ばなければならぬのであると思ひ返して居た。今迄より女達の衣装などにも女王は氣を使ふであらうと思つて薫の君は自身の家の裁縫係の所に造られてあつた女衣装の多くに、まだ縫はない絹や綾の類も添へて二條院の大輔と

いふ老女の處へ持たせてやつた。女王の著料にと思つたものは別に箱へ入れてやつた。こんなことをされるのは珍しくない事であつたから大輔は心苦しがる女王には云はないで女達に贈られたものを別けてやつた。宮御夫婦のお傍へ多く行つて居る若い女達を殊更綺麗に粧はしておくことを先にして、下の用をする女に至るまで皆新しい著物を著せた。宮は最愛の女王のために不足なことのないやうに氣は配つてお置きになるのであつたが、こんな事にまでは及ばなかつた。下情にお通じにならないのであるから、風流ばかりで世の中が渡つて行ける者と思召していらつしやるなどと宮は陰口も云はれておいでになつた。薫の君もとはそんな貴人であつたが、八の宮の山莊へ出入りし初めた頃から、人間は生きると云ふ事のために物質上の苦勞の多いものであると云ふことが分つて來たのであつた。薫の君はかうして唯だ女王に親切を盡すだけの人になつて居よう、それを慰み

にして居ようと思ふのであるが心の底から戀しくて戀しくてならぬ
い感情の湧いて来る時には以前に書いた手紙よりはこまごまと物を
書いた物を女王に送るのが習ひになつた。忍び餘つて戀を書き交せ
たこともあつた。女王は佗しいことが自分の身に添つたと歎かはし
がつて居た。これが外の人であるなら狂氣の沙汰かとも云つて恥し
めることも出来るであらうし絶交もするのであるがこの人にそんな
事の一つもすることは出来ない。さすがに戀の起りを思ふと同情も
されることだけに女王は辛く思つた。今更仲が悪くなつては却て人
に何かのあつた事と疑はれることにもなる。一人で胸を苦しめて居
た。相談をするにも智慧の英敏に働きさうな若い女達は皆京へ來て
から使ふやうになつた人達で昔からの事は何も知らない。さうでな
いのはもう年のせいだ。心の呆けた山莊以來の老女達ばかりで仕方が
ない。何にも相談を仕合つた姉の女王が戀しくてならない。姉が居た

なら薫の君はもとよりこんな心を起すわけもないと思ふと猶それだ
け悲しい。良人の宮の愛が醒める心配よりは薫の君の戀を苦勞にし
て女王は思つた。静かな日の夕方に薫の君が來た。敷物を縁側に
出して病氣のためにお話したいが出来ないと取次のものに女王は云
はせた。薫の君は悲しくなつて涙の落ちさうになるのを紛らして、
「御病氣の時と云ふものは知らない坊様でもお傍へ行くものぢやあ
りませんか、醫者ごでも何ごでもお思ひになつてお居間の近くへ通
して下さい。」
と云つた。この間の夜女王の傍に居た女は氣の毒に思つて女王を勸
めて夜詣の僧の來る坐敷へ薫の君を通すことにした。物憂く思ひな
がら、今迄と變つて俄に逢はないことにするのにも人目に立つことと思
つて女王は居間の敷居の近くまで出た。ほのかに時時ものを云ふ女
王のけはひがあげまきの君の病氣をし初めた頃の様子によく似て居

るのも薫の君には氣懸りに悲しく思はれることであつた。涙で目が見えなくなるやうな氣もした。やや奥に引きこんで坐つて居るのが恨めしくて、男は御簾の下から几帳を押して次第に中へ寄らうとするのが分つたから女王は女達の中の少將を呼んだ。

「胸が苦しくつてならないから少し押へて頂戴な。」と云つた。

「胸は苦しくつても押へると却てせつなくなるものやうですね。」と云ひながら薫の君は居すまゐを直した。

「どうしてそんなに始終おこころもちが悪いのでせう。人に聞きますと初めの間は苦しいが暫くするとさうでもなくなるものだから云つてましたよ。あなたは神経が英敏すぎて悪阻なども自分から苦しくして居るのぢやありませんか。」

妊娠のことを顯はに云はれたのを女王は堪へ難く恥しく思つた。

「胸は昔からよく苦しくなるので御坐いますよ。姉さんもさうで御坐いましたの、早く死ぬ者は皆こんなのだと云ひますわ。」

薫の君はこの言が身に沁んで聞かれた。この人も短命な悲しい運を持つた人のやうに思はれてならない。さうして薫の君は少將の居るのにはかかはらず思つて居ることを云はなければ居られない氣がした。

「私は時々氣紛らしに戀女を作らうかと云ふ氣のすることもありませんが、やつぱり駄目なんです。私はどうしても死んだ人が忘れられません。その心がまたあなたを戀しく思はせるのです。お逢ひがしたい、お話が聞きたいと思はせるのです。あなたは悪くお思ひになるか知りませんが私には疾しく思ふ處がないのですから、かうして親しいお話をさせて頂くことだけは何時迄も許して下さい。誰があなたのために誤解などをするものですか、私は男性としての能

力に缺けた處のあるやうに迄云はれて居る人間ですから、あなたも私を信じて下さい。」

「信じて居らないではかうして人が誤解もしかねない程のお交際が出来ぬものではありませんわ。亡くなられました宮様のためにも姉さんのためにも、あなたの盡して下さいました事や、あなたのお心持を承知して居るものですから、今でも私はどんなにお頼りにして居るか知れません。此方から御無理をお願いしたり、いろんなことをおねだりしたりも致して居ますわ。」

「そんなことがありましたか。何のことでせう。宇治へ行きたい、供をせいと云つて下さいましたあのことですか。併しそれだけでも私の心が幾分分つて下さつたのだと思つて喜んで居ます。」

男は恨めしい様子であつた。聞く人があつてはこれ以上のことも云へないから口をつぐんで庭の方をじつと眺めて居た。蟲の聲ばかり

(1322)

が聞えて築山の方は眞闇で何も見えない。

「私は自分の寺と云ふ程のものでもありませんがそんなやうな家を一ツ、宇治のやはりあの邊へ建てて、其處へ亡くなられた女王の顔を繪に描かせたのを置いて私は時時行つて佛勤めをしようかと思ふのです。」

薫の君はこんなことを云ひ出した。

「繪で御坐いますの、形代なんですわね、似た顔が描けるものでせうかねえ。」

「さあ描けるものぢやないかも知れません。繪から花を降らしたと云ふそんな半神の繪師でもなければ。」

と云つて吐息をついた。

「形代と仰つしやるので私は妙な話のあるのを思ひ出しましたの。」女王は身體を少し前へ出して懐しい調子で云つた。薫の君は嬉しく

(1323)

てならない気がした。

「一體それは何です。」

と云ひながら几帳の下から女の手を取つた。女王は驚いたのであつたが傍に居る少將に分ることが恥しくて去氣ない風をして居た。

「今迄そんな人の居ることも私など知らなかつたんなんですがね、その人が遠い處から今年京へ歸つて來ましてね、私の處へかうかうした者だと云つて參りましたの、私は唯だ聞いた儘にして置きましたのを、その人がこの間此處へ出て來ましたの、それがね、怪しい程姉さんに似た人なんですの、さうですから懐しく思ひました。私ね、養親だの身分が身分ですから、あなたは何になれども失禮で思へないことですけれど、繪の形代よりはあなたのお心の慰みになりはしないかと思ひますからお話いたしますの、それはよく似た人ですよ。」

女王のかう云ふのがあまり思ひ懸けないことであるから、夢の話を開

いて居るのではないかと薫の君は思ふのであつた。

「さうしてあなたを頼つておいでになるだけのお血が繋がつた人なのでせうが、何で今迄お知りにならなかつたでせう。」

「血が繋がつて居るのですか、それも私によく分らないのですけれど、お父様がね、時々そんな人が何處かに居るのが氣がかりな風をお見せになつたことがありますからね、さうだらうと思ふ位のことなんですわ、お父様のためには私なども知らない顔で居る方が好いかも知れませんが、可愛さうですわね。」

と女王の云ふのは八の宮にお附きして居た女達の一人が何時の間にかお持ちした姫様であることが薫の君に分つた。

「何處にその方は居られるのですか、くはしく云つて教へて下さい。」

「くはしく申すと話だけであなたは厭になつておしまひになるか知れませんが。」

「そんなことはありませんよ。若し私が戀しくその人を思ふやうになつたらそんなものぢやないと思ひますよ。場合によつては私は宇治の御堂の本尊にします。」

「私はお父様のために口輕なよくないことをして居ると氣が咎め咎めお話しして居るのですよ。あなたが半神の繪師をさがす氣になつていらつしやるのですものね、お氣の毒だからですわ。その人はね、母親が片附いた地方官の人の任地に今迄行つて居ましたのです。ごう身の修りを附けさせようかと云つて、母親が心配してそんなことも相談する氣で私の處へも來たのだらうと思ひます。一寸見ただけだからかも知れませんが品のない見苦しい娘とは思ひま

せんでした。けれど佛様なんかにはなれませんわ。」

「佛様とは。」

男も女も笑つた。自身の戀を避けようとする心から思ひついたことなのであらうと恨めしい氣もしないではないが、さすがにこの話は薫の君の心を引いた。薫の君は自分の戀を受けることをあるまじいことと女王は思つて居ながらはしたなめもしないのは自分の心をよく理解して居るからであると嬉しく思つて、夜が更けて行くが歸らうとはしない。女王は男の氣が附かない一寸した間に奥へ入つた。薫の君は口惜しさに鳴る胸が暫く靜まらなかつた。涙も零れた。歎きながら薫の君は二條院を出たのであつた。この苦しい自分の心をどうすれば救ふことが出来よう、世間の批難なども受けずにこの戀を遂げようとするのにはどう云ふ手段を取れば好いのかなどと戀について多くの經驗を持たない人であるから、自分の爲にも女のためにも諦める外のない戀から離れることが出来ないうで悶えるのであつた。似たと聞いてもその知らない人を故人のかたみと思つて自分は戀人に出來

るであらうか思ふとそれも覺束ないことである、そんな知れた身分の官吏の家族になつて居る人であつて見れば、自分が手許へ貰ふことも容易いことであるとは思ふが、自分を理解することも出来ず、また戀も何も自分に持たない女を自分の物にするだけではつまらないことである、かう思ふ薫の君は其方のことに餘り氣が進まないであつた。宇治の山莊を長く見ないで居ると戀しくて昔の日と今とが遠くなつた氣がしてならないので、九月の二十幾日に思ひ立つて行つた。山莊はこの頃の秋風と例の水音との中に寂しく置かれてあつた。家の中の人影なども殆ど見えないほど少い。辨の尼は呼ばれて出て來た。「寂しく思つておいでだらうと始終あなたのことを思つて居ます。近い處には自分の思ひごとと同情してくれる者もありませんからあなたと話すのを樂みにして來たんです。女王さんが死んでから随分長い月日が経つと思ひませんか。」

目に涙を浮けて薫の君は云つた。老人は咳き上げて泣きながら、「丁度この頃から小姫様のこと、女王様のお氣苦勞が初まり出したのだと思ひまして、秋はもう溜らなく厭で悲しう御坐います。やつぱりそれが女王様のお取越苦勞ではなくて、二條院の奥様はおいとしいことになつていらつしやることも承りました。何と云ふ御不運な方ばかりで御坐いませう。」と云つた。

「併し生きて居る人は長い間にまたどう運が變るか知れない、何もあんなに氣苦勞をされなくても好い筈だつたのですがねえ、他く迄あの人を苦しめたかと思ふと小姫様の結婚は私のさせたことなんだから今でも濟まない氣がします。併し二條院の女王様はあなたの想像して居る程今だつてみじめな目に逢つて居られるのぢやありません。何と云つても死んだ人は一番不運なんです。」

薫の君もまた泣いた。其うちに來る忌日の法事のことをいろいろと命じたりもした。

「かうして此方へ來る度に餘計に悲しくさせられるのだから私は此處の正殿だけを壊して持つて行つて山の寺の傍へ堂を建てようかと思ひます。それも來たついでに決めて行きたいと思ふのです。」と云つて薫の君は建てようとする堂の設計を僧房がいくつ堂がいくつといふ風に書いて見た。それ程功德のある事はないと尼は横から云ふのであつた。

「八の宮さんがおこのみになつてお建てになつた家を崩してしまふのは濟まないやうでもありますが宮様も實は此處を寺にしたいと思召であつたらうと思ふ。唯だ女王方のためには思つてその儘にされて居たものらしい。私は初めはこの儘で寺にしようと思つたのですが此處は今では二條院の女王様の財産によつて居て、いは

ば兵部卿の宮様のお邸の一つなんですから寺にするのはいけないと思ふのでそれでそう云ふことにするのです。また此處は寺にするのには餘り川に近くて水の音がやかまし過ぎますね。」

「どの方から申してもこんな結構なお思召立ちには御坐いません。昔こんな話があるでは御坐いませんか、妻に死別れたのを悲しがつて、女の骨を幾年か頸に掛けて居ましたのを佛様が御方便で骨の袋をお捨てさせになりましたので、その男も立派な悟りを開いたと申します。この御殿はあなた様と悲しがらせて煩惱をお起させする骨の袋で御坐いますから、さうしてしまふのが宜しう御坐います。彼の世の八の宮様や女王様のおためにもおよろしいことで御坐います。」

薫の君は領地預りの男を呼んで、建築する御堂の普請について阿闍梨の指圖通りに費用を辨じることなどを命じた。日が暮れたので今夜

は山莊で寝ることにした薫の君は見修めであると思つて座敷座敷を見歩いた。持佛は山寺の方へ持つて行つたのもう無かつた。辨の尼の使つて居る佛具がさびしくその間には置かれてあつた。

「御殿はまた跡へ直ぐ建てることにさせますから、それまであなたは細座敷の方へでも行つて住んで居る、好いでせう。それから二條院へ持たせて上るやうなものがあれば私の方から來る男に持たせてやつて下さい。」

なごど薫の君は辨に云つて居た。夜も尼を近い處へ置いて話させた。柏木の君のことも聞く人のない心安さに細細と語つて聞かせた。二條院から時時出て來るやうに云はれるのであるが、自分は今もう阿彌陀佛以外に見ようと願ふ人がなくなつたなごども云ふ。あげまきの君のことをいろいろと思ひ出語りして、その人の時時に詠んだ歌などを慄へた聲で聞かせた。薫の君は形代のことを云ひ出して、この人の口

からも知つたことを聞かうとした。

「私はその人のことは前に人の話で聞いたことが御坐います。また奥様のお亡れになつて間もない頃のこと、まだお邸が京にあつた時分、御坐います。中將と申してお勤めして居りました人に、宮様が御關係遊ばしたので御坐いました。誰も存じなかつたので御坐います。中將がそれから女の子を生みましたので、宮様はそれでお懲りになりました。あの聖人のやうな方になつておしまひになつたので御坐います。その人は子供を伴れまして陸奥守に片附いて任地へ行つて居りましたが、ある時京へ歸つて來まして、姫様は御無事です。ですから宮様に申し上げてくれと舊の朋輩の處へ云つて参りましたのを、宮様はお聞きになりました。何故そんなことを自分の所へ云つて來るか、と云へと仰つしやつたさうで御坐います。それからまた常陸へ轉任いたしました連合と東へ行つて居りました

のなさうで御坐いましたがこの春京へ歸つたとかで、二條院の女王様を尋ねて参つたと申すことで御坐います。姫様のお年は二十位になつておいでになるで御坐いませうか、美くしい方ださうで御坐います。中將は姫様の七八つになつておいでになつた時分の自身の悲しい心持を小説のやうに本に書いたとか云ふことも聞いて居りました。」

と云ふ。

「昔の女王さんに假にでも似た人があると云ふ話を聞いたら、私はどんな遠い國へでも尋ねて行く程の心があるのですから、女王様達の妹に違ひないその人を欲しいと思ひますよ。私がかう云つたことを話のついでがあつたらあなたからそのお母様の人々に云つて置いて下さい。」

「承知いたしました。お母様は奥様の姪に當る人で御坐いますから、

私なごとも親類になる人で御坐いますが、その人の居る頃に私が外の所へ行って居たりなご致しましてしみじみ交際ふことも今迄は御坐いませんでしたが、今度は何れ逢ひますことと存じて居ります。先日京の大輔からその姫様が宮様のお墓参りに行きたいとお云ひになるから含んで居てくれと申して参りましたが、まだおいでが御坐いませぬ。そんな時にでもよくあなた様のことをお話いたしました

せう。」

と辨は云つて居た。薫の君は昨夜後れて持つて来た絹や綿を朝になつてから阿闍梨の所へ持たせて遣つた。辨にも與へた。木枯しに紅葉が散皆つてうづだかく土の上に積つて居る庭などを身に沁む風に薫の君は見渡して居た。面白い姿をした松にかかつた宿木の蔭がまだ火の様な色をして居た。小檀と云ふ蔦を少し引かせて薫の君は歸つた。二條院の女王に宇治の蔦紅葉を持たせて遣つた時は宮が歸つ

て来ておいでになる時であつた。取次いだ女が何の氣なしに居間へ持つて来たのを、女王が何とかお云ひにならないかと苦しく思つたが、仕方もないのであつた。

「中納言からだつて、美しい鳥だねえ。」

と少し角だつた調子でお云ひになつて、御自身の手てにそれをおどりになつた。附ついて来た手紙には、

近頃お變りはありませんか、私はまた宇治へ泣きに行つて来ました。そのうちお話はなしに參らうと思つて居ます。彼方の御殿を外へ移すことはあられまし阿闍梨に頼むことにして来ました、これは是非あなたからさうして差つかへがないと云ふことを一度云つて遣つて頂きたいと思ひます。辨べんの尼にの所ところまでで宜しいから。

なごを書いてあるのをお見になつて、

「よくしらばくれたこんな手紙を書くねえ、私が居るのを知つてした

らとたらう。」

と宮はお云ひになつた。少しはさうでもあつたに違ひない。唯の穩やかな手紙であつたことを嬉しく思つて居た女王は、こうまで宮のお云ひになるのを恨めしく思つて涙ぐんで居た。こんな時程女に艶えんな趣おもしろに見えるものはないやうに見えた。たとへばんな落度があつてもこの人を憎む心は自分に持つてない、と宮は思つて女王を見ておいでになつた。

「返事を書いたらいいだらう、私は見ないから。」

宮は態と顔をお背けになる。書かないで居ては却て疑はれるであらうと思つて、女王は宇治へ行つたことを羨しく思ふと云ふこと、御殿を外へ移して寺にすることは自分の嬉しく思ふことであると云ふこと、なごを簡單かんたんに書いて返した。宮も唯それ位の交際をして居るのに過ぎないことは分つておいでになるのであるが、御自身の心から推して

いろんな想像も起るのでお腹立しい氣もするのであつた。夕風の吹く庭を眺めながら。

「あなたは物思ひがあるやうだね、秋の風が身に沁むだらう。」

こんなことをお云ひになつた。

「空から寒い風が吹いて来るのか、あなたのお心から吹いて来るのか分らない。」

扇で涙の零れるのを女王は隠して居た。この優しい心を持つた人であるから中納言も忘れることが出来ないであらうと宮はお思ひになるのであつた。妬しくお思ひになる心もそんなことで消えてもしまはない。宮は琵琶を弾いておいでになつた。女王にも琴を弾くやうにお云ひになるのを。

「姉の居ました頃は教へてくれましたのでいくらか弾けましたけれど、今ではもう駄目ですわ。」

と云つてきかない。

「こんなこと位は私の頼むことを聞いてくれたら好いちやないか。」

女と云ふものは素直なのが好いと中納言もさう云つたよ。あの人が弾けると云つたらあなたは弾くのだらう。中が好いのだからねえ。」
こんなことをお云ひになるので女王は止を得ず琴を弾いた。宮は催馬樂などを美しくしいお聲で歌つておいでになつた。もう一人夫人をお持ちになつて居ると云ふことは不足なやうではあるがやはり自分達の主の女王は幸福な人と云つて好いのである。誰が望んでも得られないこの境遇を捨ててまた宇治へ歸らうなどとお思ひになるのは悪魔の思はずことだと思ふなどと睦まじく見える夫婦を遠くから眺めて老いた女達は云つて居た。琴を女王に教へたりなどして宮は二條院を三日四日お離れにならなかつた。六條院では恨めしがつて居た。左大臣が御所の歸りに二條院へ寄つた。宮は

「私をどうするつもりで大層に左大臣なんかやつて来たのだ。厭になつてしまふ。」

とお憤りになりながら正殿へ行つてお逢ひになつた。

「昔は毎日のやうに來た所ですから、たまたま此處を見ると懐しいやうな悲しいやうな氣がします。」

なご外のことを話しながら、うながすやうにして宮を六條院へお伴れして行つた。女達はまたいろいろなことを云つた。左大臣を美しくいと賞める者もある、お迎ひになご來る憎らしい左大臣であると云ふ者もある。息子達やらさうでない高官やらを大勢供に伴れた人を左大臣と知つた女王は俄に自身の心細いことを思はせられた。やはり自分は宇治へ引籠つた方が好いであらうと吐息をつきながら女王は思ふのであつた。一月の末から女王の容體が悪くなつた。宮はお周章になつて、以前からさせておいでになる祈禱の數をまた急に殖や

させたりなごしておいでになつた。中宮からもお見舞使が來た。他家からも多く來た。女王が二條院へ入つてからもう三年になるが、宮には何とお思はれして居てもまだかうして夫人とした公然の敬意を今日までは外から受けて居なかつたのである。薫の君は宮のお案じになるのにも劣らない程の心配を女王のためにして居た。病床へ行つて自身で病んで居る様子を見たいと思ふのであるが、許されることではないから二條院へ行つては唯宮にお見舞を述べただけであるが、蔭では祈禱などもさせて居た。女二の宮の裳著がもう近いうちに行はれるさうで、それが済むと薫の君はいよいよ宮の良人におなりするのであるが、その方の事はこの人の心の内をどれ程も占めて居なかつた。二條院の女王の病を歎く思ひばかりがいつばいに心に擴がつて居た。二月の月初めに毎年ある少數の官吏の更退の時に薫の君は權大納言になつた。そして右大將も兼任することになつた。處處へ

拜命の禮歩きをして居た薫の君は二條院へも來た。女王の御殿に宮
がおいでになる時であつたから此方の庭へ來た。宮も答禮をお與へ
になるために庭へお下りになつたが美しく若い盛の男の姿が二つ並
んだ時には眩いやうであつた。右近衛の部下の將官達を饗應する宴
會を夕霧の君は弟のために六條院で開いた。來賓の中に匂の宮の交
つておいでになつたことは云ふまでもないが宮は女王の病がお氣に
懸つてまだ宴席の終らないうちに二條院へ急いでお歸りになつた。
六の君は顯はに侮りを見せられたやうに云つて恨んだ。宮は二人の
妻を同じ程に愛しておいでになつたのであるが權家の娘の思ひ上つた
心にはそれさへも飽足らず口惜しく思はれるのであらう。その夜の
明方に女王は男の子を漸く生んだ。お嬉しい上にも初めてお持ちに
なつたのが王子であることを宮はお喜になつた。薫の君も聞いて嬉
しく思つた。昨夜出席をして頂いたお禮をかねてお喜びを云ふため

に六條院から直ぐ廻つて來た。二條院へ祝詞を述べに來ない高官は
一人もない。三日までの日日の祝宴は宮家で行はれるのであつたが、
五日は薫の君から饗宴を持つて來てした。儀式の贈物は世間一般の
と同じで目立つ程にはしてなかつたが産婦の女王へ贈つた三十襲の
衣服若様の薫る初著などはよく見ると贅澤なこのみのしつくされた
ものであつた。女達なども重詰の料理の外に一襲づつの衣装を貰つ
た。七日は中宮から祝宴を賜つた。陛下も、
「三の宮もこれでいよいよ大人になつたのだから俺からの祝もやら
なければ。」
とお云ひになつて若様に太刀をお贈りになつた。この晩は數も知れ
ない程の客が來た。九日は左大臣家から祝宴を持つて來た。夕霧の
君は宮への義理を思つて息子達を皆遣してあつた。妊娠中の身體の
苦しいにつけて一際心細い思ひをし續けた女王もこの花やかな雲に

包くわつまれた二條院にじょういんの女主人にょしゆじんであることを嬉うれしく思おもふやうになつた。もう人の母ははになつた女王にやうは自分じぶんの戀こひに同情どうじやうを持つてくれることもないであらうし、宮みやも愛情あいじやうをお醒さしになる期きがなくなることもあらずと思おもふのは、薫かきの君きみには辛いことであつたが、また初はつめから持つて居ゐるその人の後見心ごけんしんからは嬉うれしく思おもはれないことではなかつた。二十幾にじふいく日に女二にょにの宮みやの裳も著ちやくが濟すんで翌夜あしたのよに薫かきの君きみとの御婚禮ごこんらいがあつた。盛さか代の天皇てんかうの御み女にょはかう急いそいで降嫁かみよめなどはされなくても好いい筈はずである。薫かきの君きみを妬ねたむ人は云いつた。夕霧ゆふぎりの君きみは家で

「陛下てんかの婿むこに花花はははしくおさらされた右大将うでだいしやうは運命うんめいの寵兒ちやうじと云いつても好いい。六條院ろくじやういんでさへも朱雀院しゆくわくいんが御末年ごまうねんになつて出家しゆつげされようと思おもふ時ときだつたからあの人の母様かみさまの宮様みやさまを妻つまにされることがお出来できになつたのですよ。私わたしなどはまして誰たれもお許ゆるしにならなかつた宮様みやさまを盗ぬすんで行いつて勝手に結婚けつこんをした男おとことより當時たうじは思おもはれて居ゐな

「つたんですよ」

こんなことを云いつて居ゐた。夫人ふじんの宮みやは昔むかしのことをお思おもひになると恥はづしくて返辭へんじもおしになるここが出来できなかつた。薫かきの君きみは晝ひるは家うちに居ゐてやはり昔むかしのあげまきの君きみを戀こひしくばかり思おもつて居ゐた。通とほつて行くことも馴なれない心こころには苦くるしくてならない。早はやく宮みやを自邸じていへお迎むかへしようと思おもつて居ゐた。喜よろこんでおいでになる尼宮にみやは女二にょにの宮みやにお住居すまひの坐敷ざしきを譲ゆづつて外ほかへ行いかうとお云いひになつたが、勿體なげないことであると思おもふ。薫かきの君きみは云いつて女二にょにの宮みやのために御殿ごてんの建増たてぞしをさせて居ゐた。そんなことをお聞ききになつた陛下てんかは内親王ないしんおうを良人らうじんの家うちへ手離てはなしておやりになつた。陛下てんかは女二にょにの宮みやの御禮ごらいを遊あそばすお氣苦勞きくろうは他たの者ものと變かりがないものらしい。陛下てんかは尼宮にみやに文ぶんをお書かきになつた。女二にょにの宮みやのことをお頼たのみになつたのである。薫かきの君きみはどうかすると今いまでも吐息といきがつか

れるのであつた。宇治の寺の出来上るのばかりが待たれてからないのであつた。二條院の若様の五十日の祝の日を早くから數へて見て、其日の贈物を作らすために美術家を家に呼んで、それぞれに得意な製作をさせて居た。薫の君は宮のおいでにならない時を考へてある日の夕方に二條院へ來た。思ひなしか今迄よりも女主人に威の附いた住居のやうな氣がした。もう今になつてこの人が自分を困らせるやうなことは云ひ懸けない筈であると思つて女王は逢つたのである。やはり此處の女主人である人は昔のままのなまめかしい若い氣持のする人であつたから薫の君はものを云はないうちに涙ぐまれた。

「心でもない結婚をしましてからは一層世の中がつまらなくつて味氣なくつて昔の事ばかりが思はれます。」

「そんなことを仰つしやるものぢやありません。もし人が聞いたらいけませんよ。」

と云ひながらも女王は陛下の婿と云はれて萬人に羨まれて居るこの人がまだ涙を零して姉の女王を忍んで居る情の深さを思つて生きて居たならと口惜しく思ふのであつたが、それでも身に添つた權威のない自分の同胞は良人が第二の結婚をするのを見ずには濟むまい、悲しみ抜いて終ひには又自分のやうに諦めてしまふ可愛さうなことにきつとなつて居るであらうと思ふと理想通りに獨身で終つたことはその人がいよいよえらい人のやうに思はれもした。薫の君が若様を是非見たいと云つた。女王は出來るだけこの人に満足させたいと思つて居るので乳母に若様を抱かせて出した。匂の宮と女王の間に出來た若様の美しくくわいもない。白い白い顔をして居て話をするやうに薫の君を見て笑ふ。自分の物にしたい氣がして親である人が羨しいと思つた。この人の内心に遁世なごと思ふ思想が次第になくなつ來たのでこんな氣が起るのかも知れない。併し唯だあげまき

の君がこんな子を自分のために残して置いてくれたなら、どんなに今日の心の慰みにされたかも知れないと思ふだけで、女二の宮によつて生れることなどは望まれもしないのである。作者はかうまで顯はにこの人の心持を書いて置かうとは思はないのであつたと思つて少し氣の毒な氣がする。夏になると御所の方から三條の宮へ入ることが方角が悪くなる云ふことであつたから、三月の末に女二の宮は良人の家にお迎へられになることになつた。その前日に陛下が藤壺の御殿へおいでになつて藤花の宴をお開きになつた。左大臣や按察大納言も來た。大納言は昔この宮の母の女御を戀しく思つて居た人であつて、後宮に入つてからも手紙などはよく書いて送つた。年月の経つうちに大納言は女御のお生みした内親王を得ようと望むやうになつた。ある人に陛下のお許しを願つてくれと頼んだのであつたが、その人は何の返辭も大納言に與へてくれなかつた。人臣の一人が御所を

妻の家に泊りに行くなど云ふことは陛下の神聖を傷つけるものであるなどこの間うちはこの新夫婦を悪く云つて居た大納言も陛下のお召で藤壺へ來ることは悪い氣持ではなかつたらしい。この日の歌は皆よい出来ではなかつたやうである。すべらぎのかざしに折ると藤の花及ばぬ枝に袖かけてけり。婿である大將の歌であることは云ふ迄もない。世のつねの色とも見えず雲井まで立ちのぼりける藤波の花。腹を立てて居る大納言の歌である。女二の宮が三條の家へおいでになるのに宮中のお表の女官は残らずお送りして行つた。車の數が三十臺あつた。お迎へに出て居た女達の乗つた車が十二あつた。宮を家にお迎へして打解けた良人心になつた薫の君は新妻を愛するに足る人であると思つたが昔のあげまきの君の戀しさはやはり依然として心のあらかたを占めて居た。この世に居る間は自身の心は

慰めようがないのであらう佛になつた來世でこそこの悲しさも何かの報ひと諦められるかも知れないとかう思つて居た。葵祭が済んでから二十幾日に薰の君は宇治へ行つた。普請中の御堂を見て、いろいろと指圖を残して、それから辨の尼を訪はうとした。それ程きらびやかでもない女乗りの車が一つと、それを守つた大きい刀を差して居る武士の大勢が橋を北へ渡つて來るのが目に入つた。田舎びた一行であると思ひながら、薰の君は山莊に入つたが、その車も同じ家を目的として進んで來た。がやがやと双方の供の云ふのを制して、誰の車かと一人の家に問はせると、

「前の常陸さんの姫様が初瀬参りのお歸りに此處でお泊りになるのです。行く時も此處を宿にしたのです。」

と醜い武士の一人は答へた。薰の君はその人かと心に點頭いた。「早く客の車を入れさせるが好い。おまへ達は誰の供をして來て居

るとも云はないで置くが好い。私に遠慮をするといけないから。」家來達にさう命じた。前のを崩した後へ新築した御殿はまだよく出家上らないで、御簾などはかけた室もまだかけない室もあつた。御簾が出來て居ないので戸を下してある坐敷に入つて、隣の客間へ車から降りて入る客の顔を見ようと薰の君はした。山莊の人達にも自身のことには隠すやうにと云はせていたから、誰が來て居るのかと車の中から聞かせに遣した人にも、

「お客様は一人ありますが、遠い處のお坐敷においでですから、おかまひなしに早くお降り遊ばせ。」

と云つて居た。若い女が飛び降りて車の御簾を上げた。其容子は決して醜くない。男の供とは餘程違つて居る。老いた女がまた一人降りて來て、

「お早く。」

と云ふ。

『なんだか晴がましいわ。』

と車の中では云つて居る。ほのかによりは聞えないが極めて品の好い聲であつた。

『この前の通りで御坐いますもの、何がお晴れがましいことが御坐いますものですか。』

と外からは云ふ。きまりが悪さうに身體を出した人の頭つきの細りして居ることなどがよくあげまきの君に似て居た。なよなよとした身體つきの上品なことなどがよくあげまきの君を思ひ出させる。扇を擴げて當てて居るから顔の見えないのが胸の鳴る程に口惜しく薫の君を思はせた。車は高くて下が低いから前の二人の女達のやうにさう容易に降りられさうにない。やつとその人は思ひ切つて降りて、そして直ぐ薫の君の居る隣の間の御簾の中へ入つて來た。赤い著物

を重ねた上に薄青い小褂を着て居た。四尺の屏風を襖子に添へて立ててあるが、男の覗いて居る穴はそれよりも上にあつたから何も何も残らず見えるのであつた。此處の間に氣を置くやうで、向うむいて浮舟の君は寝て居た。

『姫様はお苦しい御坐いましたでせう。お氣の毒に存じまして眞實に氣を揉みました。』

『泉川の渡しも随分今日は恐う御坐いましたこと、この二月は水が少なかつたのでよかつたのですわねえ。』

『併し關東のことを思ひますと、この邊の旅などは恐しくも何もないわけですわねえ。』

二人の女は元氣よくこんな事を傍で云ひ合ふのであつたが、寝たままで物も云はない主人は苦しさうであつた。横に出して居る腕が眞白である。常陸さんなどと云はれる人柄とは夢にも思はれない。薫の

君は腰の痛くなる迄立つて居たが氣附かれるのを恐れてまだ動かすに居た。

「好い匂ひがするぢやありませんか、尼さんが薫くのでせうか。」
と若い女の方が云ふ。

「眞實に好い薫物の匂ひです、ね、京の人のすることは違ひますね、關東ではあれだけ華美ぐらしを遊ばすお邸でもこんな香はさうお合せになりませんでしたものねえ。一體この尼様は好みが上手なんです、ね、著て居る著物だつて、まあ此處らの几帳だつてね。」

と年の行つた方が賞めた。縁側から女の童が來て飲ませる湯だの、また菓子やうな物だのを坐敷の中へ入れた。

「姫様少し召し上りませんか。」

と女達は云つて見たが答へないので自分達が食ふ。栗などであると思へて、齒の音がほろほろとするのであつた。薫の君は厭な氣がして

此方へ來て居たが、また暫くすると隣が覗きたくて溜らない氣になるので襖子に顔を當てるやうになつた。容貌の好い女容子の美くしい女を飽く程見て知つて居る自分が今の處ではそれ程勝れた人とも思はれないこの人にかう迄心の引かれるのが不思議であると思つて居た。辨は薫の君が覗いて居ると迄は知らなかつた。

「少しお加減が悪いので殿様は横になつて休息をしておいでになります。」

と家來の云つて居るのを聞いて、浮舟の君を欲しいやうに云つておいでになつたのであるから、そんな話を云ひ出すのに都合が好いやうにお思ひになつてお泊りになるつもりでそんなことを今から云はせてお置きになるのであらうと辨は想像して居た。領地預りの方から薫の君主従に持つて來た料理を辨も貰つたので、それを常陸さんの供達に食べさせたりなど、手落ちない計ひをして置いてから、身綺麗に粧つ

て辨は浮舟の君の居る坐敷へ来た。

「昨日お著きになるかと存じまして、お待ちして居たので御坐いますよ。今日も大層お遅う御坐いましたね。」

と云ふ。

「お苦しがり遊ばすものですからね。昨日は泉川の彼方で俄に泊ることにしたので御坐いますよ。今朝もそんなことで宿を出ますのが遅くなりましてね。」

こんなことを老いた女の云つて居る時浮舟の君は起き上つた。辨に見られるのを恥ぢて顔を此方向けて居るので、薫の君にはよく見えた。目附髪の生えやうなど、あげまきの君の顔もそれ程つくづくとは見なかつたが、これを見て昔の顔がはつきりと思ひ出されたから涙が零れた。辨の話に答へてものを云ふ聲が二條院の女王にもよく似て居た。戀しい人にこれ程似た人を今迄自分は知らないで居たもつと身分の

ない女であつてもこの顔を見ては自分の心は燃えるであらう、ましてこれは認められなかつたにもせよ八の宮の姫様に相違がないとは、自分の目で見ても分かることであるから、自分は戀人とするのに不足はないと薫の君は思つた。傍へ寄つて、

「あなたは生きて居たのぢやないか。」

と云ひたい氣がした。辨は少し話してから彼方へ行つた。薫物の匂ひの高いのは男客が近い坐敷に居るからである。そのうち向うでは氣附いたらしく餘り内輪話などもしなくなつた。日が暮れたので薫の君は其坐敷から出て辨に逢つた。浮舟の君の様子などを聞くのであつた。

「私が何時か頼んで置いたことをもうあなたは云つてくれましたか。」
「はい。去年はとうとう見えませんで、この二月の初瀬参りのついでにおいでになりましたから、お母様にさう申しましたら、恐縮をいた



しましてね、あまり分に過ぎたことですからなぞと申して居りました。其事を私から申し上げようぞ存じて居りましたのですが、その時分はあなた様が一寸お暇のない時のやうで御坐いましたからひかへて居りましたので御坐います。今度は姫様だけでお参詣になつたので御座いますが行き返りに此處へかうしてお寄りになりすのはやはり宮様のおいでになりました處が戀しくおありになるので御坐いませう。」

と尼は云ふ。

「私の來て居ることを隠蔽させるやうにしておいたけれど、何れ分ることだらうからさう云つてしまつて、そして私が戀しがつて居るのだと云つて下さい。來合して同じ家に泊るのも深い因縁があるからだと云つて下さい。」

「はい、はい、急拵への因縁で御坐いますこと。」と笑つた。



東屋

薫の君は浮舟の君を戀しく思ふのであるが常陸守の娘に戀をして居ると世間から云はれても恥しいと思つて手紙を送つたりすることはようしなかつた。辨の尼からは常陸守の妻の中將の處へ薫の君が浮舟の君を是非欲しいと云つて居ると云ふことを度度云つて來るのを中將はそれを戀と云ふ程のものと思つて居ないから縁附けようなどと云ふ氣にはなつて居なかつたが浮舟の君を八の宮の姫様と思つてかう云つてくれることを嬉しく思つた。一代に卓絶した若者のやうに云はれて居る薫の君を實際婿にするだけの資格が自分にあればよ

かつたであらうなごまた歎かれもした。常陸守には死んだ先妻の生んだ娘も中將の生んだ娘もあつた。姫様なごと呼ばせて非常に大切がつて居る娘もその中にはあるのである。極く小さいのも交せて娘は五六人あつた。常陸守が浮舟の君を除物に思つて居るのを中將は恨めしく思つて、ごうかして浮舟の君を立派な男に縁附させたいとばかり思ふのであつた。美くしい生れでもなかつたなら、かうまで中將は氣を揉むまいと思はれる。常陸守の實子の様に思はせておいて、外の娘達と同じ程な男と結婚をさせるであらうが姉妹と云つても誰も眞實とは思ひやうもない美貌を浮舟の君一人が持つて居るので、母親は一人でかうした懊惱もするのである。娘が大勢あると聞いて貴公子の端だと云はれる位の男が婿になりたがつてかれこれと常陸守の家へ申し込むのも少くなかつた。中將は上の繼娘二三人には皆それれ男を選んで結婚をさせた。良人への義理も濟んだのであるか

ら、これからは根限り浮舟の君のために好い婿を捜さうと思つて居た。守も門地の賤しい男ではないのである。先祖の人等は皆高官になつた家であつて、交際する人達にも相當な人が多いし、財産も素晴らしい程持つて居るので自尊心もかなりある方であつた。家の裝飾などは金に飽かしてしてある割には唯きらきらとする計りで田舎めいて見られるのであつた。極く若い時から東國の彼方此方に長官をして居た人であつたから、すつかり關東人のやうになつて居た。話の聲などはごつごつとして聞いて居て恐しい氣がすることもある。守は中央政府の大官達を非常にえらいもののやうに思つて恐れて居た。音樂の中で出来るものは何もなくて、弓を引くのが上手であつた。地方官と云つて蔑視する筈であるが、金力が人を引いて好い家の人達も此家を遊び處にして集つてよく遊んだ。わけの分らぬ三十一字を並べ合ふやうな歌の會などもよくこの家でした。守の人格が好いからとか、あ

れで居て顔だちが美しくいからとか理窟を附けて若い人達は守の娘を得ようと皆つとめるのであつた。其中に左近少將と云つて年は二十二三で温厚しい男があつた。學問があるとは誰からも認められて居る男であるが微微とした勢力より持つて居ないと見えて今迄あつた妻からも捨てられたのである。この少將が頻りに常陸守の娘を懇望した。中將はこんなことを云つて來る人の中で左近少將は身分も悪い方ではないし性質の静かな親切らしい人で容貌も好いこれ以上の男は世間にあつても自分の家などの婿にならうとするものではないと思つて少將からどの娘へとも云はずによこす手紙を皆浮舟の君に取次いで見せて居た。折折は自身が書くことを教へて趣味のある返事を出させたりもした。中將は一人で其男を浮舟の君の婿にする事に決めて常陸守は其婿を疎略にするかも知れないが自分は命賭で婿の爲に盡すつもりであるしまた姫様の美しいことを知つたなら男

は愛しないでは居られない筈であるからとかう思つて八月になつたら浮舟の君と結婚させる約束を少將にした。婚禮の仕度には浮舟の君の手廻りの道具などを中將はいろいろと集めて居た。出入の職人が誂へを受けて出來上つた品を持つて來る時巻繪や螺鈿の勝れた出來の物は皆浮舟の君の物にするやうに中將は隠してしまつて残つた物をこれが佳いのであると云つて良人に見せた。これも女の手道具の一つであるといふ人の云ふものを守は皆買つて一番可愛く思つて居る娘の間へ並べられるだけ並べてあるのである。手道具の中から娘は僅かに目を出して居た。琴や琵琶の先生に宮中の神樂部の女官などを雇つて來て其娘に教へさせて居た。娘が一つの手を覺えて弾くと守は喜んで贈物で先生が埋まる程の禮をするのである。浮はついた陽氣な曲の物などを教へられて氣持の好い夕方などに先生と合奏をしたりして居る時は守は涙を流して感歎して居た。こんなことを母親

の中將は見苦しい事を知つて居た。見ぬ振をして居るのを、連子ばかりを愛して自分の子に疎い風を見せる妻であると言つて常陸守は何時も憤つて居た。少將の方からは婚禮を早くさせて欲しいと言つて来た。中將は誰にも相談をせず、自身一人で決めた縁組であるから、いよいよとなつて見ると不安な處もあつて、初めから中へ立つて居た男が丁度家へ来て居たのを呼んで、中將は念を押しておかうと思つた。「今度の娘は結婚をさせようか、させない方が好いかといろいろ私は迷つて居たのでした。少將さんがあの子を欲しいと言ひ出しなすつてから、大分長い月日も経つて居ますから、あの方のお身柄が並の方ぢやないので、お氣の毒で濟まない氣がして、話をお決めることにしました。ですがね、あの子はお父様のない子ですから、母親の私一人がやきもきとするだけで、少將さんに面白くなく思はれるやうなことが結婚後にないかと、今から心配でなりません。娘は澤山あ

りますけれど、父親のある子は、私はそれ程氣になりません、あの子一人が案じられてならないんですから、少將さんは同情深い好い方だらうと思ひまして、貰つて頂くことにしました。が、もしお氣に入らないで離婚と云ふやうな問題が續いて起りますやうでは、世間の笑はれ者になりますから、そんなことのないやうにもう一度よく前にお願ひしておいて下さいませんか。」

と中將は云つたのであつた。其人は早速左近少將の處へ行つて、常陸守の妻の云つた事を話した。少將は見る見る機嫌の悪い顔になつて、「私は今度の娘さんを初めから常陸守の繼娘だなんか云ふことは知らなかつたよ、同じやうなものだけれど、人が聞いても實子の婿とは違ふからね、出入するのになつて、肩身の狭いわけだ。君はよく調べないで話を持つて行つてくれたのだね。」

「あの家の大勢の娘さんの中で一番大切にされて居る人だと聞いた
ものですから、無論守の子だと私は思つてたのです。奥さんにまさ
かそんな連子があるとは氣が附かなかつたのです。氣質や容貌の
好い事やお母様の可愛がりやうが非常なもので、何處迄も好い婿を
欲しいと捜して居ることなんかを、その娘さんの事で聞いて居まし
た處へ、あなたが常陸守の家の内輪の方につてのある人はないかと
熱心にお訊きになつたものですから、私の身内が奉公して居ますと
申して、そして其娘さんへ手紙を取次がせたのです。私には惡意が
寸毫もあるわけぢやありません。」

意地の悪い其人はかう云つた。少將はきまり惡さうにして、

「地方官の婿になるなどと云ふことは實に恥しいことなんだが、一方
ではそれに報いられるだけのことがあるので、近頃は誰でもするこ
とだと思つて私も彼處の娘さんを貰はうと思つたのだが、源少納言

や讃岐守が得意になつて出入りするのに私と云ふ者は常陸守に喜
ばれない人になつては目的が違つてしまふことになるんだからね。」
と云つた。

「眞實の守の娘さんを欲しいとお思ひになるのならさう云つて行き
ませう、まだ極く若くて姫様と云はせて守の大切に居るのが一
人あります。」

「今更違つた娘さんくれと云ふのは忍びないことだけれど私は大
體常陸守の人物に惚込んだのだからね、あの人の婿になつて見たい
と思つたのだよ。私は女の容貌なんかをかれこれ決して云やあ
しない。身分の正しい美しい妻を欲しいと思つたら、そんなこと
は容易く出来るがね、私は貧乏をしてまでもそんな妻を貰はうと思
やあしない。今は少し位人から批難されても將來の立場を安全に
しておく方が好いと私は思ふ。私のこんな心持を常陸守に話して

見て、それなら婿にしようと言ふやうなのだつたら、私は今迄の話の娘さんの妹をば妻にしてもいいよ。」

と少將は云つた。この仲人の妹が浮舟の君附の女だつたので、其手から少將の手紙を取次がせたのであるが、仲人はまだ主人の常陸守には逢つたこともないのである。それにづうづうしい男であるから、突然守に面會をしようと言つて行つた。守は自分の家へ時々来る者とは聞いて居るが、自分には一面識もない者が、何を云はうと思つて來たのかと思つて逢ひたくないやうに云はせたが、

「左近少將さんの御用で伺つたのです。」

とまた侍が云つて來たので出て逢つた。守はむつかしい顔をして居た。

「少將さんは此方の姫様と御婚約をなさいまして、其うち式を済ませようと思つて居られました處がある人が、其姫様は奥様のお生みに

なつたのには違ひがないが、常陸守さんの實子ぢやない、公達が地方官の人の婿になるのは、其人から主人のやうに大切にされること、大きい後援者を得られることが目的であるのに、世間からはさう認められて、一方ではその娘さんが守さんの實子でなければ何にもならんことになる、と云つて、いろいろと諫めましたものですから、今は迷つておいでになります。初めから自分は守さんを立派な後援者だと思つたから、初めた縁談で、繼お嬢さんのおありになることな、んかは知らなかつたのですが、それを聞きましたので、當初の心通り、まだお若い御實子も澤山おありになると云ふことです。そのお一人を頂きたいと思ひます。かう一度私からお目にかかつてお話しして見てくれとお云ひになりました。」

「私は少將さんの婚約云云はよく知らないんです。私は實子と同じやうに思つてる娘だけ、外に大勢ある子供の世話をかれこれ私

が焼くと家内が其娘を除け物にすると云つて憤つてもう近頃では其娘のことを一言も私に相談しません。外の者からそんな話をちよつびり聞いたことがありませんが私を舅にしたいから少将さんがすすんでお決めになつた縁なんかとは知りませんですよ。そのお志は嬉しくてなりません。一人私の可愛くてならない娘がありまして命にも替へられないやうに思つて居るのです。其娘の婿にならうと随分いろんな人が申し込んでくれますが、うっかりすると今の若い人はごんな目を娘に見せるかも知れないと思つて、まだ誰を婿にするにも決めないんですが左近少将さんは亡くなられた大將さんにも若い時に私はお世話になりましたんで、お子供の時分から知つて居て申し分のない若殿だと承知して居ますから是非娘はさし上げたいと思ひますが、横奪したやうに家内が思ふだらうと云ふことが一寸面倒ですな。」

かう常陸守は云つた。思はく通りに事が行きさうなのでその人は嬉しがつて居た。

『そんな御心配をなさらないで話をお決めになつてはどうですか、奥様にはどうお思はれしてもあなたの御秘藏の姫様を頂戴出来たら満足だと少将さんも云つて居られました。あれ程のお婿さんはなかなかありませんな、人格が立派で評判がよくつて若いのに浮氣らしい噂一つ持たない人で、社會の事情なんかによく通じて居られますからな領地なんかも随分持つて居られます。まだ勢力はそれ程おありにならなくつても成上りの人とは確かに違つた處があります。あ、來年は四位になれるでせう。今度藏人頭の代る時にはきつとおまへを採用してやると陛下が仰つしやつたさうです。おまへは缺點のない若者だが妻をまだ決めないだけがいけない、高等官には今日明日に俺が引上げてやらうと思ふんだから早く舅を決

めて結婚をするが好いと、こんな事迄陛下がお云ひになつたさうですよ。陛下のお氣に入りと云ふのは現今ちやあの少將さんの外ないでせうよ。これ程のお婿さんはありませんよ。外にも縁談の口があるよ云ふことですから、ぐづぐづして居ると少將さんは餘所のものになつてしまひますよ。私はあなたのためを思つてかう云ふんですよ。」

常陸守はこんなことを聞かされて心の底から嬉しいやうな微笑を洩して居た。

「今の處勢力があまりにならないでも構ふもんですか私が居ます間は頭の上へでも載せる位にして大切に見せます。よしまた私が死んでも財産らしい財産は皆あの娘に附けて置きますから安心して居て貰つていい。子供は大勢ありますが、あの娘程可愛いのは外にないからしやうがない。少將さんが眞心から愛してやつて下

さつたら、大臣の位置を買収する位の金に不自由はおさせしやしません陛下がそんなやうでおいでになるのなら少將さんの引扱は確かなものだし、この縁は少將さんのためにも私の女の子のためにも云ひ分のない縁と云ふもんでせうなあ。」

と常陸守は云つた。その人は夢中になつて喜んで其日は妹にも逢はずに歸つた。直ぐ少將の處へ行つて、常陸守の言葉をいかにも喜ばしさに云つた。田舎者らしいことを守が云ふとは思ひながら、少將も嬉しくないことはなかつた。大臣になる運動費でも出すとは餘り大袈裟な云ひ分であると少將は耳こそばゆく思つた。

「でも細君は恨むだらうね。」
と少將は云つた。

「なあに奥さんも守があなたに上げたいと云ふ娘さんは大切にしてるには違ひがないんですよ。唯姉ですから前の話の娘さんを先に

結婚させなければならぬと思つた位のことせう。」
口から出任せの事をその人は云つた。浮舟の君を非常に守の細君
が大切にすると此間迄云つて居た此人が手の裏を返したやうな事
を云ふのを唯ふんふんと聞いて居る少將は胸口者に違ひない。浮
舟の君と結婚するのに決めて置いた日迄も變へずに少將は其日に常
陸守の實の娘と結婚した。常陸守の妻の中將はその一日二日程前迄
は何も知らずに居たのである。中將は女達の衣裳などもそれぞれ新
調して着せたりして浮舟の君の婚禮仕度にはばかりかかつて居たので
ある。浮舟の君にも髪を洗はせておつくりをさせて見たりした。少
將などと云はれて居る位の人の妻にさすことがしむじみ惜しく中將
はこの時思つた。八の宮の女王として生ひ立つたのであつたなら宮
の御後であつても望まれた通りに源氏の大將に縁附ける氣にも自
分はなるであらう併し我子ながら敬意を拂つて居るのは自分だけで、

世間では常陸守の娘と思はれて居るのに過ぎない少し分つて實子で
ないと思つた人は一層父なし子のやうな悔りをこの子に對して持つ
に違ひがないなと思つて中將は悲しみますには居られなかつた。浮
舟の君の盛りがそのうちに過ぎることを思つてはまたともかくも名
家の子である少將が懇望するのであるから此結婚はさせた方がいい
と云ふ氣にもなつた。中將は今迄媒の男の口車にも十分載せられて
居たことは云ふ迄もない。女だから守を欺したのよりもつと欺し
やすかつたに違ひない。もう明日か明後日が其日であると思ふと中
將はじつとして居られずにあちこちと立ち歩いて指圖などをして居
る處へ良人が出て來た。
「おまへは私の婿を自分の方へ横奪する氣でそんな騒ぎをして居る
のかい。智慧がないこつた。處が若い殿様は立派なおまへの姫様
に御用はないんだてさ。賤い俺の娘が欲しいのだと仰つしやるよ。」

おまへは俺に隠しているんなもくろみをしてお氣の毒だが若い殿様は其方は厭で此方にしたいと云ふお話を持つておいでだよ。俺はどつちでもお心任せだと云つて受合つた。」

同情もなく常陸守はかう云つた。中將は呆れてものも云へなかつた。何と云ふあさましい男であらうと少將を思つたり世の中と云ふものはこんなものかと思つたりすると涙も落ちる位悲しくなつたので中將は此處を立つた。浮舟の君の傍へ行つて見ると其人は云ひやうもない美しくしい顔をして居た。つまらないことで歎かないでもない、この人はもつと高い運命を持つて居る人だと何やら囁かれて居るやうな氣になつて中將は微笑んだ。中將は浮舟の君の乳母にその話をし

「お父様がないと聞いたものだからさうでないまだ子供見たやうなものど結婚するなんかそんな氣によくなれたものだねそんな人間

を假にも私の婿だと思ふのは厭だけれど守さんは結構な縁だと思つて子供を婚すのだらうよ。云つて見れば似合つた人達かも知れないね私にはもう一切知らない顔をして居るよ何處かへ暫く行つて居たいよ。」

と云つて居た。乳母も腹を立てて居た。「これが却て姫様の御幸福で御座いますよ。そんな心を持つた男と云ふことが御婚禮前に知れたのですもの姫様を眞實の紳士にお婚せたいものですよ。源氏の大将様をほんのちよいとお見掛けしたのですが命が延びるやうな氣が致しました。あの方様が御所望をしていらつしやるのですもの奥様お上げになる氣におなり遊ばしたらいかで御座います。」

「まあ、ごんでもない。人の評判では大将さんはおまへお望みが高くて左大臣様や按察大納言様や式部卿の宮様などが是非姫様を貰つ

て欲しいとお云ひになつたのもお聞きにならずに結局陛下の御秘藏の宮様の婿におなりになつた方と云ふぢやないかね心底から私の子などを愛して下さるものかね三條の宮様のお召使と云ふことにして近くへ置かうと位はお思ひになるだらうがさう云ふことはいくら結構な方の處でも苦勞が多いから厭だ。二條院の女王様はお幸福な方と云はれておいでになつてもお氣苦勞の少くないのを聞いて見るとさうしても二心のない男と結婚をしないのは嘘だと思はせられる。私にでも覺えがあることだよ八の宮様は優しくてお美しい完全な方でおありになつたけれど私を一つの人格を持つた人間とも思つて下さらなかつたから、ごんなに私は悲しい思ひばかりをしたか知れない守さんはあんな男だけれど私の外に妻だと思つて居る人は一人の半分もないのだからそれだからこそかうして長く添つても行けるのだよ。折折は今度のやうな憎らしいや

うなこともする人だけれど惡氣があるのぢやないから喧嘩をしなから何も何かとか諦めが附けて行ける。高等官か宮様方などで外見の好い男を相手にしても釣合はない身で居てはかうは行くまいよ。さう思ふとこの宮様が可愛相でならないけれどさうかしてそのうちに好い縁を見附けることにしませうよ。」

などと中將は云つて居た。守は婚禮の仕度に夢中になつて居た。「あなたの宮様の處には女達などの容貌の好い人も多いから婚禮の間だけ妹の方へ貸して貰つてやつてくれ。座敷廻りの几帳なんかも新しく拵へて懸けたらしいが俺の方は急なことで間に合はないのだから其儘座敷も皆使はせてくれ。」

と云つて好いやうに飾つてある座敷へ守はまた屏風などをうんと澤山持つて来て其處等中へ立てたりした。中將は見苦しいとは氣が附いて居るが一切口を入れないと云つたことだからと思つて黙つて見

て居た。浮舟の君は北側の方の座敷へ行つて居た。

「もうおまへの心は俺によく分つた。まさか同じ子なんだからさうさう冷淡には出来ないだらうと今迄は思つて居たのだ。よしよし、世間には母親のない子は澤山あるんだ。父親一人でもさせようと思ふことは出来るんだ。」

常陸守はかう云つて其娘を當日の晝間から乳母二人に云ひつけて精いつばいにおつくりをして綺麗にさせておいたので愛らしい娘には見えて居た。十五六であつて春はまだ低い。髪は上着の裾に届く程の長さがあつて美しい。

「お母様に外の當があつた人を好きこのんでおまへの婿にしくつてもいい訣なんだが、折角あれ程の人がおまへを欲しいと熱心に云つてる事だし外にも婿にしたがる人があるさうなんだから外へ取られては惜しいとも思ふもんでさうしたんだ。」

父親は美事だと思つて居る娘の髪を撫でながら仲人に欺されて居るとは知らないでこんな事を云つて居た。少将は婚禮の當夜から三日の夜迄の儀式をどうして行つてくれるであらうと想像して見ると花らしい様子が目に浮んで嬉しくてならない。一方で少し恨まれる位のことは好いなどと思つて少将は婚禮をしたのであつた。中將と乳母はあさましく思つた。態とらしい僻んだ仕打をする人から思はれるかも知れないがと思ひながら、こんな手紙を中將は二條院の女王に書た。

用事の御座いませぬ時に餘り手紙を差上げましては馴馴しい事をすると無禮にお思ひになるかと存じまして、ようお訪ねも申し上げませんでした。突然で御座いますが、姫様を暫くあなた様のお傍へ置いて頂きたいので御座います。少しわけのあることなので御座います。小い部屋が一つお空きになつて居らないでせうか、もし姫

様をお預け致しますことをお許し下さいましたら嬉しいことだらうと存じます。私の力の及ばないことがありまして姫様のために苦しく思はれます事のありますものですから誰にも申しやうがなくてあなた様にお訴へ申し上げます。

と云ふのである。泣き泣き書いたのである。哀れに思つて女王は見だが、八の宮が子としてお許しにならなかつた人を自分の一存から妹として其人を見るのは好いことではあるまい、さうかと云つて其人が世の中の浪に揉まれて苦しむのを見て居ることは、それも八の宮のために出來ないことである、かう女王は思ひ惑うた。大輔の處へも中将は手紙でこのことを頼んで來たのであつた。

「何れわけのあることなんで御座いませうから、お斷りになつて氣の強いやうにお思はれになつてはいけません。母親が誰とも云へないやうな人を立派な方でやつぱり兄弟の中に入れておいでになる

方も澤山ありますから、あなた様もさう思し召してお上げ遊ばせ。」と大輔は女王に云つた。好い座敷でもない處が一つ空いてあるが、辛抱すれば暫くの間位居られないこともなからうから、來て好いと思ふと女王は中将へ云つてやつた。中将は嬉しく思つて其用意をした。浮舟の君もなつかしく思ふ姉の女王の處へ、一層近寄る機會が今度のやうなことがあつたために出來たのを却て嬉しく思ふのであつた。守は少將にどうして誠意を見せたら好いかと思つてもいい考へがない。東國出來の地の粗末な絹の何反も續いたままの物などを幾つも幾つも家來や供廻りの贈物に出したり、場所が狭くなる程食物を並べて馳走してやつたりするのを、下卑た男等はそれを結構なことに思つて喜び合つた。さうだから少將はいよいよいい男を撰つて持つたものだと思つた。少將の晝の居間だの家來の詰所だの、幾間も座敷をそんなことに使ふので家は廣いけれど東御殿には上の娘の

婿の源少納言が住んで居るし、その外の座敷なども息子が多いから空
いても居ない。細座敷などへ輕輕しく住ませて置くのも厭だからと
思つて、それで中將は二條院へ遣らうと思ふのである。誰も八の宮の
姫様と浮舟の君を云ふ人がないのを、母親の身柄から侮られて居るの
であらうと残念に思つて、八の宮の許してお置きにならなかつたのも
知らない顔で女王の傍などへわざわざ近附かせようとも中將はして
居る。乳母の外に若い女達が二三人附いて行つた。母親も送つて行
つたことは云ふ迄もない。西側になつた方の間の北寄りの人などの
餘り來ない處へ落着いた。居間の中へ入れて女王はこの母子に逢つ
た。女王が奥様らしく、若様の世話などを何かとして居るのをまだ結
婚をよろしない我娘と並べて羨ましく思ふ中將の心は哀れである。
自分も八の宮の夫人には姪ではないか、夫人に使はれて居たと云ふだ
けのことで宮は自分の子を子どもお云ひにならなかつた。今かうし

て女王の傍へ娘を伴つては來て居るものの味氣ない親子であること
んなことを中將は思つて居た。浮舟の君の座敷には身體に穢れのあ
る人が居ると云ふ張紙を故としたから人は誰も來なかつた。二三日
中將も居る積りらしい。前に來た時とは違つて今度はゆるりと女王
の二條院の生活と云ふものを中將は見るこゝが出来るのであつた。
匂の宮がこの院へお歸りになつた。見たく思ふので中將はものの間
から覗いた。櫻の枝を折つて來たやうな美しくい男で、おありになる
と宮を思つた。今の中將が唯一の頼みである常陸守よりはいくら立
派か知れないやうな五位や四位の役人が跪いて御用を伺つて居た。
また若い男のお供も多かつた。中將の繼子であつて式部丞で藏人を
兼任して居る男が陛下のお使で宮中から出て來たが、宮のお傍近い處
へもよう來ないで御用を述べたまま歸つた。この宮の夫人になつ
て居る女王の幸が初めて中將に分つた。もう一人妻を持つておいで

になると云ふことで憎いやうにも蔭でお思ひして居たのが恥かしい、
こんな方は一年に一度きり通つてお出でにならないとしても女は喜
んで居なければならぬのではあるまいかなどと思つて居た。宮は
若様を抱いて可愛がつておいでになつた。女王の前にある短い几帳
を横へ押しやつておしまひになつて宮は話しておいでになつて。何
方も美しくしてこんな似合しい夫婦はないと思はれるのであつた。
八の宮が簡易な生活をしておいでになつたことを思ふと、同じ親王と
申し上げて御境遇はさまざまであるなど云ふ氣もした。いろん
な人が伺候して來るが宮は加減が悪いからとお云ひになつて終日女
王の居間の几帳から外へお出でにならなかつた。夕飯も女王と並んで
此處でお召上りになるのであつた。こんなことの總てが氣高くて別
世界を見るやうな氣がした。併し中將は自分の娘をこの宮にお並べ
してもやはりこの通り似合つた夫婦に見えるであらうと云ふ自信を

持つて居るのであつた。これからは氣を高く持つて、少將位を常陸守
と婿に取り合つたりするやうな馬鹿らしいことはしないで、おかう、自
分の娘はどんな勝れた天分を持つた人かも知れないのであるからな
どと夜通し中將は思つて居た。翌日は晝前に宮がお起きになつて中
宮が御病氣でいらせられるために參内をされようとして着更へをし
ておいでになるのを、また見たく思つて中將は覗いた。正装をお着け
になつた宮のお姿はまた似るものもない程氣高くて清らかでお美
しい。若様を可愛くてならないやうにしておもちやにしておいでに
なつた。食事を済ませになつて西御殿から直ぐ參内されることに
なつて居た。朝から來て詰所の方で待つて居た伺候者などは、かうし
て初めて御前へ來て物を申し上げたりなごするのであつた。非常に
めかした美男でも何でもない妙な顔をした男が、直衣に太刀を提げた
姿で出て來たのを見て、

「あれあれですよ、左近少將よ、初めはね、あの姫様のお婿さんになる約束をしておいてね、また欲からね、それをやめて常陸守の小ぼけな娘を貰つた人よ。誰もこの御殿の人は知らないことですから、私に常陸守の内方に知つた人があるから聞いたのよ。」

と朋輩に囁いて居る女があつた。中將は自分が聞いて居るのを知らないでこんなことを云つて居ると思つて胸が騒いだ。その男を見てはまた何故こんな男を婿にしようと思つたのであらうと侮蔑の心が多く湧いた。若様が這ひ出して御簾の下から宮のお行きになるのを覗いて居るのに氣がお附きになつて、宮はまた歸つておいでになつた。「中宮さんの御病氣がよければ今日歸つて来るよ、お悪ければ宮中にお泊りする。この子が氣になつて一晩でも外に居ることが實に私は苦しいのだよ。」

ておやりになつてからお出になつた。中將は見ても見ても見飽かぬいややうにお美くしい宮のお留守になつた後では物足りない氣がした。女王の前へ行つて宮を非常にお賞めすると、

「田舎者になつたのね。」と云つて女王は笑つた。

「奥様にお別れ遊ばしました頃のあなた様は、どうおなり遊ばす方かと私達はもとより宮様もお案じ遊ばしたもので御座いますのに、あなた様はかうして好い御運を持つてお出でになる方ですから、宇治などの山の中でも立派に大人にもおなり遊ばされたので御座いませう。それにしても大姫様がおいで遊ばしたらと思ひまして、お目に懸れないのが悲しくてなりません。」

かう云つて中將は泣いて居た。

「私はお母様にお別れしたのはね、何も分つて居ない間のことだから、

そんなことも世の中にはあることだなどね、諦めもつけるけれど、姉様に死なれたほど情けないことはないと思つてね、今でもそれが悲しくて悲しくてならない。それに源氏の大将さんが、どうしても姉様のことが忘れられないと云つて、宮様をお貰ひになつてもまだその事で悲しがつておいでになるのを見ると、生きていらつしつたら良人からあれだけの愛を受けられる幸福な人に姉様はなつておいでになつたらうと思つて残念でならない。」

「大将様は陛下が餘り大切に遊ばすので、奥様に對して御慢心遊ばしていらつしやるので御座いませう。全體大姫様がおいでになりまして、大姫様は宮様をお貰ひになりませんで御座いましたらうか。」

「さうだね、やつぱり宮様もお貰ひになつたかも知れないね、世の中のことば末の末まで見ないで見さしておくと非常に好いものやうに思はれるのね、けれどね、あの方は全く違つた方よ、眞實に怪しいと

思ふ程死んだ戀人のことばかりを思ひ詰めていらつしやるのだものね、お父様のためにだつて御法事を私の知らない間にして下さつたり、お寺を建てて下さつたり、そんなこともして下さるの。」

「全くさう云ふ方なんで御座ませうね、私の姫様をさへもね、大姫様の代りに妻に欲しいなどと、あの宇治の尼さんを通して仰つしやつて下さいます。私は何もいい氣になつて、姫様を大将様にお上げしようと思つたり、そんな恥しいことは致しませんけれど、唯だ大将様の御心中をお氣の毒だと存じて居ります。」

などと云ふ序に中將は細かにではないが、もう女達も知つて居ることであるから、何れ女王の耳にも入ることであらうと思ふので、浮舟の君が少將から縁組を破談にされたことなどを話した。

「私はもう懲り懲りました。結婚など云ふ問題はこれから考へないつもりで御座います。私の居ります間はああしておきまして、

それから尼にでもなつて貰はうかと思ひます。」と云つた。

「眞實に可愛相な人ね父親がないとさう云ふ風に侮られるのね、けれど獨身でおかうと思つても、外からそれは破らせてしまふからね、私などこそお父様のお遺言もあつて獨身で居なければならぬ人だつたのだけれど、運命はこんな背景の所へ引き出してしまつたのよ。だからやつぱり結婚はすることに今から決めて置いたらいいと思ふ。尼さんになんかあの人をするのは餘り可愛相よ。」

姉らしく女王のかう云つてくれるのを中將は嬉しく思つた。もう年は行つて居るが中將は醜い女ではない。大變肥つて居る處だけが常陸さんらしい。

「八の宮様が子のやうに云つて下さいませんでしたのが本で、あはして姫様は人からも侮られるのだと思ひましてお恨めしく思つたの

ですが、あなた様が親切に云つて下さいますので私は初めて嬉しく思ひます。」

などと云つて、それから中將は長い間の心の苦痛を女王に訴へた。

「私はまたかうして何時迄もあなた様のお附きになりました置いて頂きたい氣がしてなりませんけれど、家の方には小さい子供などが大勢御座いましてね、母様母様と申して騒で居るだらうと思ひますと、やつぱり氣に掛ります。明日あたり私だけは歸ります。姫様はあなた様のお心任せに致して置きます。」

中將は浮舟の君と云ふ荷を女王に負はせようとした。併し其人は女王の心に厄介に思はれるやうな人ではなく、顔も美しく、氣質も圓満な姫様で、愛しないではならないやうにも思はれる人であつた。恥しがることも餘り甚しくはなくて、無邪氣にはして居るが、才氣も見えないではない。上手に女達などにも顔を見せないやうにして居た。

物を云ふ容子などが怪しい程あげまきの君に似て居た。形代を欲しいと云つて居る薫の君に見せたいと、かう云ふ氣に女王がなつて居た時

「大將様がおいでになりまして御座います。」

と人が云つて來た。几帳などを繕つて眞直に直したりなどして女達は客を待つ用意をして居た。中將が、

「私も大將様を拜見させて頂きませう。大變な御美男のやうに云ひますけれど、宮様の方が一段上でいらつしやませうね。」

と云ふと、

「さあ、どうとも申されませぬね。」

と一人の女が云つた。

「いつか二人で向合つていらつした時宮様は醜男にお見えになつてよ、別別に見て居るとさうでもないんだね、美男なんかと云ふもの

は人を悪く見せるから厭なのね。」

と女王は笑つた。

「けれど奥様のお目には大將様の方が悪くお見えになる筈で御座いますね。」

こんなことを云ふ女もあつた。薫の君は今日は澤山の供に守られて居た。宮中からの歸途に寄つたからであらう。中將は歩いて入つて來る大將によく目を留めて見た。美しくしいなごと思はせられるのではなく、瀟洒とした男で、何と云ふ艶な人であらうと、見る者が思はず大きい息の吐かれる人である。知らず知らず誰も額へ手をやつて髪を繕ふやうにもなつた。

「私は昨晚中宮様の御病氣のことを伺つたものですから宮中へ參つたのですが、宮様方は誰方も來ていらつしやらないので、中宮様がお氣の毒で私が今迄お附きして居つたのです。今朝も此方の宮様の

おいでになつたのが遅かつたものですから、これはあなたがおさせになつた落度だなどと思つて居ましたよ。」
と薫の君は女王に笑ひながら云つた。

「細い御觀察を遊ばしたこと。」

と女王は云つて居た。宮の宿直をされるのを見て置いて薫の君は女王を訪れたのであつた。唯の心での訪問ではもとよりのない。なつかしい調子で薫の君は何時ものやうな話をした。やつぱりあげまきの君を忘れられないと云つて居る。こんな年が経つて心が移つて行かないわけはない。唯自分の處へ来た時にだけ云ふことなのであらうかと女王は思つたが、さうでもあれば人の様子はさうらしく見える筈であるが、思ひ沈んだ薫の君を見ては、唯唯此方の心も引入られる程哀れを覺えさせられるのであつた。女王を戀しいと思ふこともまたいろいろの言葉で告げられた。女王はその戀を轉じさせたいために、

浮舟の君のことを云ひ出した。

「今此方に来て居ます。」

とも云つた。薫の君はその人の顔をも見た後なのであるから戀しくない事はないが、さう云はれたからと云つて、この場から戀を移すやうな心にはなれない。

「山寺の本尊にしたら好いとあなたが仰つしやつた方なので、すねけれど本尊は眞實に私の手に渡して下さつてこそ有りがたく思はれるのでせうが、ときどき話に出して見せられるだけでは信心も何も出来ません。」

「我儘な御信仰ですこと。」

と笑つた女王が薫の君には戀しくてならない。

「ぢやあ是非お妹さんを私に下さい。私はね、女王さん、あなたが妹と戀をせよなどとお云ひになるのを聞くと昔の女王さんがあなたと

結婚をしてくれとお云ひになつたことを思ひ出して、あなたの身體に異變のある前兆ぢやないかなどとも思ひます。」

「いよいよ形代をそれに決めますか。戀しい時時に撫でて居ませう、形代を。」

と戯談のやうなことを云つて紛らした。

「形代だけに思つていらつしやらずに、やつぱり一人の女なんですから、よく愛してやつて下さいましね、形代は終ひに用がなくなるまで川へ流されてしまふものですから可愛さうな名ですわ。」

と女王は云つた。

「眞實に形代だけでは私の心は慰められないかも知れませんね。」

「來て居る人が怪しく思ひますから、今日はもうお歸り遊ばせよ。」

と云つて女王は歸さうとした。

「ではお客様に私のことをよく話して置いて下さい。決して淺はかな戀で云つて居るのではないことなどを、あなたのお口から云つておいて下さい。」

かう云つて薫の君は歸つた。中將は理想的の美男であると思つて薫の君を見て居たのであつた。浮舟の君の乳母が時時姫様を大將に縁附けしたらなどと云ふのを思ひも寄らないことのやうに云つて自分には押へて居たが、この人であるなら偶さかより來てくれない良人であつても娘に持たせて見たい、自分の娘は普通の人の妻にさせるのには餘りに美しくさが過ぎて居る。東夷のやうな人ばかりを長い間見て居たので、あんな少將をさへも見よい男でもあるやうに思つて、婿にとらうとした自分の愚さは何と云つて好いか分らない程だなどと中將は思つた。薫の君のもたれて居る柱も、敷いて居た物も好い匂ひが

すると云つて例のことであるが女達は一しきり騒がしい程其人のこ
とばかり云つて賞めるのを中將は微笑んで聞いて居た。女王は薫の
君の云つて置いたことを中將に傳へた。

「あの方は心のお變りになんかなる方ぢやない。女二の宮様がああ
しておいでになるのだから氣が進まないかも知らないけれど、尼様
にすると思へばその辛抱位は出来るだらうと思ふわ。」

「何も尼にしたいのが私の本心でも御座いません。物思ひをさせた
り人の侮蔑を受けたりするよりはと思ふからで御座います。好い
縁があれば結婚もいたさせますとも。それは大將様をお見上げし
ましては、どんな下な召使にでもなつてあの方のお傍へ行きたいと、
若い人なんかはきつと思ふで御座いませうから、姫様なども嬉しい
良人だと思ふでせうけれど、氣苦勞はきつと附きまどうて參るだら
うと思ひますと、私もまた迷ふやうになります。ともかくも

あなた様のお心任せに致します。いややうに遊ばして下さいまし。」
と中將は云つた。女王は過去に於ける薫の君から推して未來も確か
なやうに云つては居るものの神や佛でない人間同志であるから、どう
間違ふか知れないと思ふと、苦しい責任を負はせられるやうに思つて
其儘もう何ともよう云はなかつた。翌日は暗いうちに常陸守の方か
ら車で妻の迎へをよこした。守は妻を脅したやうな手紙を書いて來
たのである。中將は浮舟の君のことを女王に頼んで歸らうとした。
母に別れることを心細く思ひながら、姉の女王の所に置いておかれる
ことも浮舟の君には嬉しく思はないことではなかつた。中將が車に
乗つて出ようとする時分にはもう大分明るくなつて居た。匂の宮は
若様を見たくてならなくお思ひになつて、この夜明に目立たない車に
乗つて歸つておいでになつた。そのお車と中將の車とが門の處で行
合つたので暫く出る車は留めさせられた。今頃に急いで出て行かう

とするのは誰の乗つた車なのであらう忍んだ戀をする人などはかうして歸るものであると御自身のお心から推して女王のために憎い想像をも宮はおしになつた。誰かとお聞かせになると、

「常陸さんのお歸りです。」

と云つた。これを聞いて宮のお供廻りの中の若い男等が、

「様とはいいね立派な様さ。」

と云つてどつと笑つた。中將は悲しかつた。浮舟の君のために自分も人らしい地位が欲しいなども思つた。そしてわが娘を自分と同じ程の境遇に置いておかうと思はれないのであつた。宮は女王の傍へ行つた。

「常陸さんと云ふ人をあなたは戀人にして居るのぢやないの、綺麗な供をつれた車が出て行つたよ。」

とお云ひになつた。やつぱり疑つておいでになるのである。

「大輔なんかの若い頃の友達なんでせうけれど、そんな人が華美な供なんかを伴れて居るのですか、あなたは私の困るやうなことにばかりして何でもお云ひになるのね嫌ひにおなり遊ばしたから。」

と云つて彼方向く女王を宮は可愛くお思ひになつた。晝前までまた宮は此處でお寢みになつたが、いろんな人が伺候して來るので午後は正殿へおいでになつた。中宮の御病氣はもうお快いさうであるから、誰も誰も嬉しさうな顔をして夕霧の君の息子達などは碁を打つたりなどして居た。宮もお交りになつていろんなお遊び事も行はれた。夕方に宮は西御殿へおいでになつたが女王は下の建物の方へ行つて髪を洗つて居る處であつた。その方に附いて行つたり、また部屋へ下つて行つたりするものもあつて女達も居なかつたから、小さい女の童の居るのをお呼びになつて、

「こんな日に髪を洗ふから私は寂しくて困る。」

と女王の處へ云はせておやりになつた。女達は何時も宮のおいでに
ならない日を撰つて女王に髪を洗はせるのであつたが、宮のお嫌ひに
なるこの髪洗ひを今日に限つてしたのは、九月十月は曆で髪洗ひに悪
い月になつて居て、今日よりもう日がなかつたからである。若様も寢
て居て其方の座敷へ行つて居る女達もあつたのである。宮は仕方な
しにあちこちと座敷を歩いたりなごしておいでになつた。西の座敷
の方は平生は人が居ないのに、其處の縁側に御覽になつたこともない
女の童の姿がちらと見えたので、宮は新參の女が来て居るのだらうか
とお思ひになつて、其處の座敷へ行つて見ようとお思ひになつた。人
の居る間より二間程此方の襖子が細目に開いてあつた。宮が其處か
らお覗きになると、向うの間の少し開いた襖子から一尺程離れて屏風
が立てられてある、其れが一枚疊まれて居て、縁側の御簾に几帳を添へ
て立ててあるのが見える。二重になつた几帳の切が一枚だけ上へ上

げられて居る。華美な藤紫の著物の上に女郎花のやうな色の上著を
著た人が外を眺めて居た。好い家の娘が初めて宮仕へに出て來たの
であらうと宮はお思ひになつて、此方の方の襖子を開けてその隣の間
まで入つてお行きになつた。向うの人は知らないのである。草花が
美しく咲いて居たり引かれた水の落ち様が面白かつたりする中庭
をじつと見入つて居るのである。もう一つ襖子を宮はお開けになつ
て、屏風の横からなほよくその女を見ようとおしになつた。人の來た
のを女王の方から何時も用に通つて來る女だと思つて起上つた浮舟
の君は美しくしかつた。宮の好色なお心が動かかないわけはない。宮は
女の著物の裾をお捉へになつた。宮は後の襖子をお閉めになつて、そ
れと屏風との細い間へ身體を置いておいでになるのである。妙に思
つて扇で顔を半分隠しながら浮舟の君は後を見た。限りもなく妖艶
な女である。宮はお思ひになつた。

「あなたは誰なの名をお云ひよ。」
扇を持つた手を捉へてかうお云ひになつた。浮舟の君は唯怖えて居るばかりであつた。宮は女に何等の敬意をお持ちにならないのであるから、御自身の顔を女に見られないやうにしておいでになる。浮舟の君は此人は自身を戀しく思ふなごよく言傳ててよこす大將かと思つた。高い匂ひが身體から立つのでも大將らしいと思ふのである。浮舟の君は恥しくてならない、どうすれば好いかと思つて居た。乳母は先刻から何時もの女達の聲のやうでもない聲のするのは何うしたことなのであらうと思つて向側の屏風を開けて出て來た。

(1406)

「まあいけませんよ。あなた。」
と乳母が云ふ位でお驚きになる宮ではおありにならない。こんな逢つたばかりの女にでも宮は眞面目に御自身の戀を云つて聞かせておいでになつた。

「誰と云ふ名を云つてくれないうちは私は彼方へ行かないよ。」
と云つて宮は其處へ馴れ馴れしく横になつておいでになつた。宮でおいでになることがこれで分つたから乳母は呆れて居た。
「今晚のお明りは燈籠を點けることに致しませう。奥様はもうお居間にお歸りになりますよ。」

なご女達の云つて居る聲も宮のお耳に聞える。お居間の前だけは残して外の座敷の廻りの戸をもう閉め初めた。此處は平生使はない座敷だから高い置棚と厨子が一つづつ置いてあるだけで極くざつとした飾りよりしてない。袋に入つた儘の屏風などが間の中の彼方此方に置いてあつた。近くまで戸を閉めに來たついでに右近と云ふ大輔の娘が此處へ來ようとした。

「まあ暗いこと、まだ灯が點かなかつたのですね。戸を閉めるのが餘り早過ぎましたね。」

(1407)

と云つて右近は戸をまた一つだけ開けた。宮は困つた人が来たと思つておいでになつた。乳母は自分の身體が置場もないやうに苦しく思つて、

「ごなたですか、一寸いらして下さいまし。」

と此方から聲をかけた。右近は手搜りで入つて来たが、薄暗闇に男の横になつた姿が見えた。宮が例の癖をお出しになつたのであると右近は直ぐ思つた。

「まあ、ごんだこと、上様お悪戯を遊ばしてはいけません。私は奥様に申し上げます。」

とお脅しする氣で右近は云つた。浮舟の君も乳母もそれを情けないことであると思つた。宮は何とも思つておいでになるのではない、この美しい女は何處の誰なのであらうと云ふことばかりに氣を取られておいでになつた。氣強い風は見せないが、死ぬ程苦しく思つて居

る様子が哀れにお思はれになつて、宮は宥めようとしておいでになつた。右近は女王に西座敷の始末を話した。

「例の御病氣が出たのだね、困つたことになつたのね、あの人のお母様がどんなに口惜しがるか知れない。氣の毒だね、私があんなに安心して居ればいいと云つて歸したのに。」

浮舟の君を哀れに思つて、かう女王は云つて居るが、こんな場合にどうすれば好いか、そんなことは考へられない。女達でも若くて少し顔の佳いものがあると宮は捨ててお置きにならないのであるから、かう云ふことにもなつたのであらうと思ふのであつた。どうして宮にお見附かりしたのであらうなどと思つた。

「お客様の多い日でしたものね、きつと遅くなつてから此方へいらつしやるのだと思つてましたわね、だから私達なども部屋に行つて居たのですわね、大體乳母さんがうつかり者ですよ。私は力任せに宮

様をお伴れして来ようかと思ひましたよ。」

「姫様がお可愛相ですね。」

右近と少將はこんなことを嘯いて居た。宮中からお使が来て中宮の御病氣が俄にまたお悪くなつたと云つた。

「なんて間が悪いんでせう。」

と云つて立ち上つた右近は宮に其事を申し上げに行かうとするのである。

「およしなさいよ、もう仕方がないぢやありませんか、餘りお脅しして

お上げ遊ばすなよ。」

と少將は留めた。

「まだいいのよ。」

と右近は云つて居る。女王は其話が耳に入つたから溜らない程恥しく悲しく思つた。少し確りとした人は宮に添つて居る自分までをあ

さましい人間に思ふであらうなごど女王は思ふのであつた。右近は西の座敷へ行つて使の云つたよりも少し大層にして中宮の御病氣のことを云つた。

「一體誰が使に來たんだ。大形に云つて私を脅すのだらう。」

と宮はお云ひになつた。

「中宮様のお侍の平茂經と申して居ります。」

と右近は答へた。宮は浮舟の君と別れて出ておいでになるお心にはなれなかつた。右近は茂經を西の庭へ呼んだ。初に取次いだ者も出て來た。

「中務の宮様も御参内なさいました。大夫様は唯今参られる處で御座います。門から車の出る處を見て参りまして御座います。」

と茂經は云つた。中宮はよくさう云ふ風にお悪くおなりになることがあるので嘘でないことが宮はお思はれになるにつけても女王がど

う思つて居るかと思ふことをも恥しくお思ひになつて、浮舟の君にいろいろと言葉を残して出てお行きになつた。浮舟の君は恐しい夢から醒めたやうに思つた。身體中が汗になつて居た。乳母は姫様を扇いだしながら、

「こんな處においでになるのはよくありません。眞實によくありません。かう云ふことが起り出して來たのですからもう此處にいらつしつてはいけません。外の男様にこそ善いとも悪いともお思はれになつても宜しいのですけれど、姉様に憎まれて一人の男様を争つたり、そんなことをしていいもので御座いますか、直實にね、姫様私がおじつとお傍について恐い恐い顔でお睨みして居ますと、宮様は厭な下種女だと憎くお思ひになつたと見えて手をおつねりになりましたよ。戀人のすることのやうで可笑しう御座いました。彼方のお家では今日もひどいお喧嘩があつたさうで御座いますよ。おま

へは一人の姫様のために俺の子を皆構はないんだ、俺の子はごうなつてもいいのか。結婚式早早母親が家に居ないやうな見ともないことがあるかなどと守様は大變な権幕でお憤りになつたさうですよ。先程彼方から参りました下男が申して居りました。そんな者にさへ聞える程なんで御座いますね、奥様がお可愛相で御座います。全體少將さんがいろんな波風の原なんで御座いますよ、あのひと云ふものさへ初めからなかつたら、時時は面白くないことがあるにはありまして、今迄通りお家にあなたもおいでになれたので御座いますかねえ。」

などといつた。浮舟の君は頭の中が無茶に掻き亂されたやうで、これからどうすればいいかなどとも思はない。唯女王が自分をどう思ふであらうかと思ふ一つのことだけが苦しくてならないのであつた。浮舟の君は俯伏して泣いて居た。

「そんなにお泣き遊ばしてはいけません。お母様のない人が眞實は可愛相なのですよ。お父様のないと云ふことは人目には頼りなさうに見えますが、繼母に憎まれる娘さんよりいくらいいか知れませんよ。御心配なさらないでもお母様が皆よくして下さいますよ。初瀬の観音様が守つていらつしやるんですもの、きつと、きつと、あなたの御運はよくなつて行きますよ。初瀬へは度度おいでになつたのですもの。」

乳母は信じる處があつて安心して居るやうなことを云ふ。宮はこの西の門から今日はお出になるのであつた。御所へ近いのでお急ぎになる時は何時もかうなのである。歌を口誦んでお行きになる美しくい宮のお聲を聞いて、浮舟の君は顔を赤くして居た。女王は何事も知らないやうな風で、遊びに來ないかと浮舟の君を迎へにやつた。「唯今加減が悪う御座いますから、少しよくなりましてから。」

と浮舟の君は乳母に云はせた。

「ごんな風にお悪いのですか。」

とまた女王の方から重ねて云つて來た。何處と云ふ事もなしに苦しいと云ふ二度目の返事を使に行つた女が云つて居る時

「奥様は何う云ふ氣で聞いていらつしやるかしら。」

なごど右近や少將は云つて居た。薫の君が妻らうと云ふ氣になつて居る人に、さうした汚染をおつけになつた宮を惡魔のやうにも女王は蔑めて思はれるのであつた。宮のやうな性質の方は御自身の心から推して清淨な者にも忌はしい疑ひを懸けたりもし、また萬一そんな過失を女がしても許しもおしになるでむらう。薫の君の様な人は新しい妻の身に附いて居る汚染を何れ程痛恨の深い事とするかも知れない薫の君に氣の毒であると共に浮舟の君が可愛相でならないと女王は思つた。姉と妹が集り合つたと云つて喜んで居ると、もう運命は妹

を悲しい方へ突き落した。世の中と云ふものはこんなものであるから、自分などは人の云ふ通りに幸福者であるかも知れない。薫の君が自分への戀をさへ捨ててくれれば、自分はまだ物思ひなどはしないなどとも女王は思つた。多い髪であるから容易に乾かないで、起きて居なければならぬのが苦しうである。白い著物を一重著ただけであるのが艶かしく見えた。浮舟の君は氣をいろいろと使つて居るうちに、眞實の病も起つて来て苦しうにするのである。

「さうしていらつしやるに痛くないお腹を捜られますから、少し我慢遊ばして女王様のお傍へ行つていらつしやいませ、其前に私は右近さんに逢ひまして言ひ譯をして置きます。」

と乳母は浮舟の君に云ふのであつた。乳母は女王の居間の傍迄来て、一寸お話しがあると云つて右近を呼び出して貰つた。すぐ出て来た右近に、

「御承知の先刻の騒ぎで姫様はお心をお痛めになりましたね、眞實にお可愛相なので御座います。何も落度もおありにならないのですがお年が行かないものですから、あなんで御座いませう。女王様に優しくても云つて頂けば直ぐ氣がお直りになるでせうから、唯今お伴れいたします。」

と云つた。浮舟の君は強い處のない氣質で、女達なども自分を見てどう思ふだらうと恥しく思ひながらも、乳母が引立てるやうに云ふと、其儘になつて姉の處へ行つた。涙で額髪の濡れたのを見られまいとして、暗い方へ向けるやうにする。浮舟の君の顔は、女王をもう一人とない美人であると思つて居る。女達の目からも決して見劣りがするやうには思はれない。飽く迄妖艶な趣のある人であつた。この人を戀人として宮がお思ひになる日が来たなら、女王のために嬉しくない事が起るに違ひない、これ程でない女でも珍しい人好きの宮でおありになるか

らなごと思ふ女もあつた。

「姉さんがお死になつてから私は戀しくて戀しくて、一人残つて生きて居ることが恨めしくてならない位に思つて居たのさうだのに、あなたはよく姉様に似て居るから私はどんなに心が慰められて居るか知れないのよ。もう外に兄弟と云つてはないんですからね私が姉様を思つたやうに、あなたもこれから私を思つて頂戴よ。」

こんなことを優しい調子で女王は云ふのであるが、浮舟の君は今日の夕方、二つの仲の隔りになつて居るやうな気がして返辭もろくろく出来ない。もう一つは田舎めいた事を云ふやうに自分の云ふことが思はれないであらうか云ふ氣もするのである。

「長い間お目に懸りたく思つて居ましたあなたのお傍にかうして居ますのが、何にも替へられない程私には嬉しいのですわ。」
と、こんなことだけを美しくい聲で云つて居た。女王は繪を出して詞

書を右近に讀ませながら浮舟の君に見せるのであつた。一心になつて見て居る火影の横顔の品の好い妖さ艶かしさをあげまきの君にそつくりのやうに女王は思つて見て居た。どうしてかう迄似て居るのであらう、これは父宮に似る處が多いのであらう、姉の女王は宮に似て、自分は母に似て居ると古くから居る女達などは皆云つて居たなどと思つて、女王は涙ぐんで居るのである。それにしても姉の女王の美は限りもない品を持つた一面に、人間としてはなよなよとし過ぎはしないかと思はれる位の和味を持つたものであつたが、これはまだ心の修養の足りないせい、若若しく妖かにばかり見えて、姉の女王のやうな艶しさはよう持たない併し、もう少し心を確りとさへさせて居れば大將の妻になつても恥しくないだけの女であらうなどと、姉心に女王は思つて居た。長く話して居て夜明近くなつてから寝た。女王は浮舟の君を傍に寝させた。八の宮のお健在だつた頃の平生のことなどを

くはしくもないが好い程に女王は妹に云つて聞かせて居た。浮舟の君は父宮を戀しく思つて一生逢ふことの出来なかつたことが悲しまれるらしい。昨日のことを知つて居る女達は、

「奥様があんなに大切さうにお可愛がりになつてももう仕方がないのにね、姫様は廢物におなりになつたのだから。」

「まさかねえなかつたやうですよ。乳母が私をわざわざ呼んでああ云つたんですもの。上様も逢つて遇はざる戀のやうな歌をお口にしてお出ましになりましたよ。併し故とかどうだかそれは知らないことよ。けれどね、あなた實際姫様の昨晚の様子はそんなことになかつた人のやうだつたぢやありませんか。」

なごど囁いて居た。乳母は朝から車を借りて常陸守の家へ行つた。

乳母は中將の心を騒がせることを云つたのである。

「まあそんなことがあつては女達なんかどう云ふだらう。女王さん

だつてきつと氣を悪くしていらつしやるに違ひない、こんな問題は高い人も低い人も同じなんだから。」

と中將は云つた。そしてじつとして居られないやうに其日の夕方にまた二條院へ行つた。宮はおいでにならなかつた。

「まるで赤兒さんのやうな人をお傍へあげて置きました、あなた様の處で御座いますから安心をして居ていいと思ひながら、もうもう不都合がないかないかと案じてばかり居るものですから心が何處かへ行つて居るやうだなどと主人なんかにかましく云はれますんで御座いますよ。」

と中將は女王に云つた。

「あの人は何もそんなに云ふ程の子供らしい人でもないのに何故今更そんなことをあなたは云ふの。」

と云つて笑つた女王の目が自分の心を讀まうとして居るものやう

に氣の咎められる人は思ふのであつた。中將は濟まない氣がして何うしても昨日のことを明らさまに女王に云ふことは出來ないのである。

「お傍へ差し上げて置きますことは年來の望みがかなつた氣が致しまして嬉しいので御座いますが、またよく考へて見ますと、姫様はごうせ缺けた運を持つた人なんで御座いますから、やつぱり厄にした方がいいかと思ひます。」

と云つて中將は泣いた。女王は可愛相になつて、

「何か私が憤つて居るとか何とか、そんな事で誤解をして居るのぢやないの、私は妹を出來るだけかばふつもりで居るんだから、時々は疾風かせのやうな方はおいでになるけれど、そんな時にでも私の傍の者は皆よく心得てるんだから、あの人の困ることのないやうには氣を附けるでせうよ。だから安心して居てもいいと思ふだけだ。」

と云つた。

「私はあなた様をどうのかうのと思つて居ていいもので御座いますか。姫様が八の宮様のお子様でないにしても、あなた様と私とまた姫様とは血が繋がつて居ると思ひまして嬉しく思つたりする程力に存じて居るので御座います。」

などと、いろいろ云つた後で、

「あの人は明日と明後日が悪日なんで御座いますから、人の來ない處へ伴れて參つて謹ませたう御座いますの、それが濟みますとまた差し上げます。」

と云つた。本意ないことであると女王は思つたが、留めることも出來なかつた。中將はそぞろ心になつて居るので、長くも居ずに浮舟の君を直ぐ伴れて歸つた。中將は何かの時に常陸守に内證で使ふことがあるかも知れないと思つて、三條邊に小さい面白い家を拵へて置いたの

であつた。まだ全くは出来上つて居ないので内部の裝飾などもよくしてないが、其處へ浮舟の君を伴れて行つた。

「あなたと云ふ人一人をどうすれば私は安心が出来るのだらう。八の宮様に捨てられた私等母子がまた其方のお身内へ頼つて行つて恥しい目に逢つたりしてはいよいよ世間で笑はれます。情ない世の中だね。眞實に昔に死んでしまへばよかつたと思ふ。こんな家だけにと辛抱して居て、そして此處に居ることは決して人に知らせないやうにおしなさいよ。今にこの家を住みよい家にして上げるから。」

こんなことを云つて中將は歸らうとした。浮舟の君は泣いて居た。自身の運命を悲しがつて居る心持が哀れである。親はましてこの最愛の娘に人から變な取沙汰をせられる様なことになつたかと思ふと悲しくてならない。それで向う見すの様に娘を女王から離して急に

伴れて來たりもしたのである。それに道理は解つて居ながら中將は少し我儘な處のある女であつた。常陸守の家へも今迄のやうにして浮舟の君を置いて置かれぬことはなかつたのであるが、少將夫婦の居る座敷の近くなどへ置くのが中將の性質では溜らなく可愛相に思はれて、あんな計ひもしたのであつた。長くは別れて居たことのない親子であるから、残る人も歸る人も心細いやうな氣がした。

「彼方の部屋に置いてある女達なんかも呼んでお使ひよ。男の泊り番のこともなんかもよく頼んでおいたけれど、私は歸りたくない。併し守さんに腹を立てられるのも厭だ、厭だ、歸りませう。」

泣きながら中將は歸つた。守は少將の世話を女親も一緒になつてよくしてやらなければいけないと云つて何時も憤るのであつた。此人が因になつて浮舟の君の災難も起つたのであると思ふと恨めしくて、中將はやつぱり少將のことは餘り構はないで居た。二條院で見すば

らしく見えた時から輕蔑して見るやうになつて浮舟の君の婿として
見る人だつたのをなご云ふ羨望の心だけは無くなつた。中將は少
將の來て居る晝に其座敷へ行つて新夫婦の様子を覗いた。少將は白
い綾の著物の上に薄色の直衣を着て庭を見るために縁に近い處へ出
て座つて居た。若い一人の美男のやうに見えた。娘はまだ極く若く、
姿の趣なご云ふものは少しも知つて居ない風で横になつて居る。
二條院の女王が宮と並んでおいでになつた容子を思ひ出すと中將は
何と云ふみじめなことだらうと思ふ。傍に居る女達などに戯談を云
つたりして居る男の容子は二條院で見た時のやうな見苦しいもので
もない。此間見たのは別の少將なのかも知れないと中將がそんな氣
のした時、

「兵部卿の宮様の二條院の萩と云つたら實に好い花だよ萩にはあんな
なものもあるものなかなあ此間伺つた時には丁度これから宮様が

お出ましになる處で直ぐお供して出たので折つて頂いて來ること
も出来なかつたけれどねその時にね宮様がうつろはんことだに惜
しき秋萩に折るるばかりも置ける露かなとお口誦みになつた御容
子をおまへ達に見せてやりたかつたよ。」
とこんなことを少將が云つた。少將も歌を詠まうとして居た。心を
思ふと人間とも思へない男が、ごんな歌を作つて居るのかと中將は蔑
んで思はれるがさすがに無學相な顔もして居ないので何と云ふかと
思つて、

しめゆひし小萩が上もまよはぬにいかなる露にうつる下葉ぞ
と書いて持たせてやつた。少將は氣の毒に思つて、

宮城野の小萩がもごと知りたらばつゆも心を分かすぞあらまし
小生はお目に懸りて事情を詳しくお話し申し上げむと存じ居り候。
と書いてよこした。これを見た中將は自分の娘が八の宮の子である

と云ふことを少將は聞いたらしいと思つた。興奮して居る中將の心では、自分の子は女王と云はれるべき人である、それに相當した縁に附かせて見せるなどと思つた。中將は頻りに源大將のことを思つた。其人と同じ程の美男とは思つたのであるが、匂の宮には前者に對するやうな憧憬の念は微塵も起らない。娘を苦しい境に陥れた仇のやうにも中將は宮をお思ひするのである。中將はまた、薫の君が娘を娶らうとする心を持つて居ながら、中へ立てた人に任せて自身は素知らぬ顔をして居るのが冷淡な恨めしいこと、のやうに思つた。姫様の若い心にもその人のことが思はれるであらうなどと思つた。三條の隱宅に居る浮舟の君は毎日寂しくてならない。出入りする者と云つたら東國訛りのある男計りであつた。庭には眺める花もまだ植わつて居ない。二條院の女王が娘心に戀しくてならない。恐ろしい目に合せようとした若い人もさすがに思ひ出されぬこともない。囁かれた

甘い言葉も忘れずに居た。自分の身體に移つた其時の好い匂ひがまだ残つて居る様な氣もした。秋が深くなつて行く。薫の君の爲には最も悲しい季節である。寢覺寢覺に冷い涙が流れた。宇治の御堂が出来上つたと云つて来たので、薫の君は出かけて行つた。久しく來なかつたので、山の紅葉も珍しく思はれ、邊りの景色が見廻はされた。新築後の山莊の御殿の立派に飾られた座敷座敷を見ると、質素に生まれ居た昔のこの家のことが思ひ出されてならない。今日は八の宮も戀しくてならぬ。薫の君は思つた。改築したことを後悔する氣も起つた。庭などもすっかり見違へるやうに修理されてあつた。故に山莊らしい趣を見せて作つた處もあつた。泉の小流になつた脇の岩に座つて、

なほ絶えぬ清水になどかなき人の面影をだにとどめざりけむ
こんな歌を薫の君は思つた。涙を拭いて庭から上つて辨の居る處へ

薫の君は行つた。上段の間の端に腰を掛けて御簾を手で撥ねながら、奥に居る尼と語るのであつた。話の中に薫の君は、「いつかの話の姫様は此頃は二條院に居られると聞きましたけれど、何だかきまりが悪くて私は其人の處へ何とも云つて行かない。あなたに最後迄世話をして貰はなくつてはいけない。」とこんなことを云つた。

「先日あのお母様から手紙が参りました。何か常陸守の家がごたごたおしますさうで、姫様を二條院の女王さんにお預けしたり、また外へ移したり、そんな事をして此頃も何處かの小さい家に住ませて居ますつてね、近い處だつたら宇治へ遣つて置くのが安心なのですけれど、などと申して参りまして御座います。」

「遠い處だ遠い處だと云ふ宇治へ私こそ飽かないでよく来るものだと思ふと、自分で自分が憐まれてならない。」

例のやうに薫の君は涙ぐんで云つてゐる。そしてまた、「そんな氣樂な所に居るのは好都合ぢやありませんか、あなたが一つ行つて来てくれたらどうですか。」と云つた。

「今更京へ出て参る氣にはなりません、女王様の方へもよう伺はない位ですもの。」

「彼方へは聞えないやうにさへすればいいぢやありませんか。人のためにすることは功德になりますよ。」

「好い年をしまして戀のお仲立ちなどをすると申しますことは誰からも笑はれますことで御座いますからね。」

「でもさうして、姫様が常陸守の家に居ない時と云ふのは極く好い折なんだから、思ひ切つて行つて貰ひたいね、あなたが決心してくれたら、明後日あたり迎への車をよこしますから、それに乗つて姫様の處

へ行つて下さい。そして處を私に一寸教へて置いて下さい。」
かうまで薫の君が強ひて物を頼むことは曾てまだ無いことであるか
ら、辨もしぶりながら承知をした。

「其前にあなた様の方からお手紙をお上げして置いて下さいません
か、あなた様の方では何とも思つていらつしやらないのに私一人の
物好きでお伽話の狐のお婆さんのやうなことを致すと思はれると
悪う御座いますから。」

「手紙は遣りたく思つてますけれど、人は口の悪いものだから右大將
は常陸守の娘に戀をして居るなどと云はれますからね、そんな恐ら
しい男を欲しがつて居るやうに云はれますからね。」

と薫の君が云ふので辨は笑つたが、浮舟の君の境遇を哀れに思つた。
暗くなり出したので薫の君は歸つた。草花の美くしいのを取らせた
り紅葉を折らせたりして持つて歸つた薫の君は、それを女二の宮にお

見せするのであつた。不足のない妻であるとは薫の君は思ふのであ
らうが、餘りに敬意ばかりを見せて馴れて行かない氣味がないでもな
かつた。陛下からは嫁にやつた娘を案じる普通の父親のやうに、尼宮
にも度度頼むと云ふことを手紙で書いておよこしになるので、薫の君
も能ふだけ妻の權威を宮にお持たせしてあるのであるが、朝廷の公務
冷泉院へお仕へする事の骨折の上にもう一つ妻の宮に始終氣をつか
はなければならぬと云ふことは苦しい事であつた。薫の君は辨に
約束をして置いた日の朝早く、氣質を知つた侍一人と誰にも顔を知ら
れて居ない牛飼一人とを車に附けて字治へやつた。
「領所預りの方に居る者で、田舎者らしい者ばかりを供につけさせて
くれ。」
と薫の君は命じてやつたのである。必ずと薫の君が云つて居たので
あるから、辨は困つたやうにも思ひながら身姿を繕つて車に乗つた。

辨は薫の君が何度此道を往復したであらうなぞと思つて悲しい心持で山や野を見ながら京へ来た。常陸守の隠宅で自分の来たことを云はせると初瀬詣りの時に供をして居た若い女が出迎へた。浮舟の君は嬉しく思つて老いた尼を見た。なつかしい父宮の身近に居た人と思ふからである。

「何時もどうしていらつしやいますかと存じて居るので御座います。がこんな尼で御座いますから御遠慮致しましてよう伺はないで居りました。彼方の女王さんの方へもさうなんで御座います。處が姫様この間右大將様がおいでになりました節にね、お話を伺ひますと、あなた様をお賞ひしたいと、それはそれは熱心に思召していらつしやるので御座います。私としてじつとして居られないやうな気が致しまして、其お話を申し上げるつもりで急に参りました。」と尼は云つた。浮舟の君も乳母も立派な男であると思つた薫の君か

らの縁談を話すのであるから嬉しいとは思つたが何も俄かに薫の君が此處へ来ようとは思はなかつた。其晩の十時頃に、

「宇治から参りました。」と云つて門を叩く者があつた。誰であるかと云ふことは辨に解つて居るのであるから門を明けさせた。

「辨の尼さんにお目に懸りたいのです。」薫の君は宇治の領地預りの男の名を云つて斯う云はせた。辨は座敷の戸口迄出て来た。雨が少し降つて冷い風も吹いて居た。高い匂ひが見る見る家中に満ちて行くので家の人は來客が右大將の薫の君であつて、姫様の良人にならうとして來たのであると點頭かれた。不意のことでは何の仕度も出來ないことを誰も誰も心配した。「長い間戀しく思つて暮して來た私の心持を一度よく姫様に聞いて頂きたいのですから、さう願つて見て下さい」と大將さんが仰つしや

います。此方へお通しなさいますか。」

と客に逢つて来た尼は云つた。どう返事をして好いか解らないので
浮舟の君は黙つて居た。乳母が、

「態態おいで遊ばしたのを、お歸しするのも失禮ですし、さうかと申し
て唯今此處へお通し申すことも姫様の御一存ではお出来にならな
いで御座いませうから、一寸お待ちして頂きまして、本家のお母様に
御相談致したらいかがで御座いませう。近い處なんですから。」
と云つた。

「若い方同志のお話と云ふものは決してさう早く決るものぢやあり
ませんから、それに大將様はごくごくお堅い方なんですからいいで
せう。」

なごと尼は云つて居た。外は雨がやや強い降になつて居る。泊り番
の侍が庭を見廻る聲などが聞えた。

「門にある車を入れるなら入れて、門を閉めんといかんよ、こんな客の
供をして來たりする男はどんな者か知れないから用心が悪いよ。」
なごと云つて居る。生れてからまだこんなことは聞かされたことが
なかつたなごと思つて薫の君は苦笑して居た。田舎びた縁の端に座
つて居るのである。

さしこむる葎やしげきあづまやのあまりほごふる雨そそぎかな
こんな歌を内方へ聞える程の聲で薫の君は口誦んで居た。長く經つ
てから縁に沿うた南の座敷へ薫の君を通した。浮舟の君は恥しがつ
て逢ふのを厭だと云つて居るのを女達が押すやうにして客の居る隣
の間へ伴れて行つた。主客の間に遣戸が少し開けてあつた。

「私はこんなものの外へまだ座つたことがない。」
と薫の君は云つて居たが、どうした時にか中へ入つてしまつた。宇治
の家で思ひがけず透見をして知つてから、戀しくて戀しくてならなく



なつたどかう男は女に云つた。たよたよとした姿で大様な風のある
浮舟の君を得た薫の君は失望もしなかつた。可愛い人である心か
ら思はぬでもない。もう其内に夜が明けて来た。鶏は啼かないで、
ろいろなことを云ひながら道を通る人聲が聞えて来た。
『こんな朝なんかに見ると頭へいろんな物を載せて歩いて居る人が
鬼のやうに見えるのね。』

なご女達の云つて居るのを聞いても薫の君は珍しい気がした。泊
り番の男が門を開けて歸つて行つた。薫の君は一人の女に車を縁側
の方へ著けさせることを命じさせた。薫の君はその車へ浮舟の君を
抱いて載せた。女達は婚禮の月でもない九月に姫様がこの家を出て
行くのはよくないなご云つて騒いで居た。

『なめにね九月は十四日から眞實の節に入るんですよ。今日はたし
か十三日だから好いのですよ。』

と尼は論すやうに云つて居た。

「私は参つたついでに今日は女王様の方へ伺ふつもりで御座います。」
と辨は云つたが薫の君は此結婚のことをさうまで直ぐ女王に聞かせるのは恥しいと思つたから、

「あなたが居ないと困つてしまふからそんな事を云はないで是非一緒に
絡に行つて下さい。」

と云つて車に載せた。

「誰か一人來るが好い。」

と女達に薫の君が云つたので何時も姫様の傍に居る侍従が乗つた。
乳母や尼様の供をして宇治から來て居た女の童などは残されてしま
つた。何處へ行くのかと思つて居ると此車は宇治へ行くのである。
河原を通つて法性寺の傍を通る時分に全く夜が明けてしまつた。侍
従は嬉しくてならない氣になつて居た。浮舟の君は俯向いてばかり

居た。石の多い道になると、

「苦しいでせう。」

と云つて薫の君は抱いてやつた。夫婦と外の二人との間に羅の著物を一枚吊して隔てにしてあつたが、朝日が射して来たので何方からも見通しのやうに見えた。尼はきまりの悪い氣がするにつけても、あげまきの君を夫人としてこそ斯うして薫の君の車へも乗らうと思つたのであるのに、思ひも寄らない人の新婚の供をするなどと思ふと泣くまいとしても涙が落ちて仕方がない。侍従はめでたい婚禮の時に尼の姿と一緒に車に乗るのさへ縁起が悪いのに泣き迄する年の寄つた人は仕方がないものであると思つて憎らしがつて居た。薫の君は傍に居る新妻は憎くはないが、邊りの景色からいろいろと昔の戀人が聯想されてならない。山の中へ進んで行くに随つてますます悲しくなつて心の中に迄霧が廣がつて行くやうに思はれた。二人の袖が重つ

て車の外へ長く出て居たのが霧に濡れて浮舟の君の袖口から出て居る紅い單衣に男の直衣の縹色が落ちて染まつた。氣が附いて中へ引き込めた。

かたみぞと見るにつけても朝霧に胸も曇りてぬるる袖かな

と口誦みに薫の君が云つて居るのを尼は聞いてますます涙に沈んで居た。厭な人である侍従はますます思ふ。尼のすすり泣きの聲が聞えるので薫の君も思はず泣くやうになつた。此人が悪い感情を起さないであらうか、こんな様子を見せるのは可愛相であると思つて、「私はこの道を通つて宇治へ行き出してから長い月日が経つと思ふと其間にいろいろと變つたことのあるのが思はれてね、思はず悲しくなつてしまつた。あなたも少し起き上つて山の色を眺めて御覽却て氣持がよくなりますよ。」と云つた。手で無理に起すと、浮舟の君は恥しさに扇で顔を半分以

上も隠しながら外を見るのであつた。其目附などもあげまきの君によく似て居るとは思ふのであるが、あまり大様すぎたやうな様子は少し頼りない氣を起させた。無邪氣な風に見えて居ながら、神經質のきびきびした風も何處かに見えたゆかしい人であつたとあげまきの君を思ひ出すと、形代は得てもやつぱり悲しみは空いつばいに満て居るやうに思はれた。山莊へ著いた時にはあげまきの君の靈魂が此處に居て、自分が新しい妻を伴つて山莊へ來たのを憎いと思つて居ないだらうかと云ふやうな氣がした。誰のためにしないでいい戀までして慰めを得なければならぬ、悲しい心にされて居るのかなど、もまた思つた。餘り傍に居るのは悪いと思つて、暫く薫の君は外の座敷を彼方此方と歩いて居た。浮舟の君は母親が知らない間にこんなことになつたのを何と思ふであらうなどと考へると悲しかつたが、薫の君が情の籠つた言葉をいろいろと囁いて呉れるのを嬉しく思ひな

から途中は來たのであつた。領地預所から例の様に人が澤山來た。薫の君は其方から食事を運ばせて居た。姫様の膳は尼が拵へて出した。川や山の自然の景色とよく一致させて作られたこの家の居心地が晴晴とするので、昨日迄町家の中の小さい隠宅に隠れて居た浮舟の君は蘇つた氣もするのであるが、薫の君は自分を妻として此處へ置いておくのであらうか、尼宮附の人として邸へ伴つて行かれるのであらうか、これから後の事がどうなるかと不安に思はれた。薫の君は今日明日を此處で謹慎して居たいからと云ふ様な手紙を、尼宮にも若い宮にも書いてお送りした。傍へ出て來た薫の君のくつろいだ姿は、さうでない時よりも一層艶な人に見えた。浮舟の君は恥しいが、もう隠れることも出來ない人になつたのであるから仕方がない。贅澤な著物を、浮舟の君は著て居るが少し田舎めいた好みの交つて居ないこともない。昔のあげまきの君が古くなつた著物を著ながら、それがごんなに品

よく艶に思はれたか知れなかつたことなどを男は思つて居た。髪の毛の多いことは若いだけに勝つて居る。女二の宮の美しく髪にも劣らないと思つて見て居た。この人をこれからどう待遇したら好いであらう、妻として京の家へ迎へるのも餘り人騒がせのことになるし、また女達並のことにして置くのも自分の本意ではないと斯う思つて薫の君は當分何と云ふことなしに浮舟の君を此處に置いて置かうと云ふ氣になつた。此處では逢ひに来る間が遠くなるのが自分ながら苦しい辛抱であると思ふのであつた。後後までの頼もしい事をいろいろと薫の君は云つて居た。八の宮のことなども話して聞かせた。戯れも云つて見たが女はまだ恥しがつて居るばかりであつた。物足りなくは思つたがこれならば自分が教ることが出来ると思ふのであつた。田舎仕込の小才の見える生意氣なやうな女であつたら形代でも何でもあつたものではなからうなと思つた。一絃琴や十三絃を出

させて薫の君は自身で弾いて居た。この女はそんなことが出来ないであらうかと思ふからである。宮がお薨れになつてからはこの山莊で琴に手などを觸れたこともないなと思つて宮のお弾きになつた一絃琴のなつかしい音色などを思つて、

「宮さんも姉さんもおいでになる頃にあなたも此處で大きくなるとよかつたのね八の宮様は好い方で他人の私でも戀しくて忘れられないんだの、あなたは何故生きていらつしやるうちに一度でもお目に懸らなかつたらう。」

と薫の君は云つた。浮舟の君は恥しくて白地の扇を玩具にしながら黙つて横に寝て居た。色の飽く迄白い人である。額髪のあたりなどは最もよくあげまきの君に似て居る。教へることの中でも琴などは云ふものは容易に覚えさせられるものだからなと薫の君は思つて、「琴を少し弾きますか、吾妻と云ふ琴だけは弾くでせう。いい名だも

の「
と云つた。

「私はそんなやまと言葉も何のこともだか分らない人なんですもの、琴を弾くことなんか知つて居るものぢやありませんわ。」
と浮舟の君は云つた。



浮舟

匂の宮はあの薄暗い夕のことをお忘れになる時がなかつた。非常に身分の高い女とは思はれなかつたが綺麗な人であつたと浮舟の君のことをお思ひになつて、其儘消えたやうに何處かへ行つてしまつたことが残念にお思はれになつてならない。

「あなたはそんな人だと思つて居なかつた私が召使の女位に全身の愛をそそぐものでもないぢやないか、そんなつまらない戀位であな
たを忘れると云ふことがないぢやないか、それに一寸私が戀をした
つて云つて、あの女を何處かへ隠してしまふなんか随分あなたは嫉

妬深いのね。

こんな事を云つて宮が女王をお責めになる事もあつた。そんな時には苦しくて、いつそもう有りのまま何もかも宮にお打ちしようかとも女王は思ふのであるが、薫の君がまだ公然の妻のやうにはして居ないにもせよ、愛して居るには相違ない。浮舟の君の事を自分の口から洩しては、それがその儘でお置きになる宮の御性情ではないのだから、薫の君に濟まない戀しくお思ひになる時には、女達の實家へ歸つた後もお追ひ歩きになるやうな方なのであるもの。況してこんな月日が経つ迄お忘れにならない程思ひ込んでおいでになる戀なのであるから、在處が知れたらきつと大變なことをお起しになるに違ひない。外から聞いてお知りになるのなら、仕方もないが、大將のためにも妹のためにも禍根になるやうなことを自分がしてはならない。殊に妹であるだけに、そんな葛藤が世間へ知れた時には、自分には恥しく思はなければならぬ。

斯う女王は思つて、宮のじれておいでになるのを、餘所に見て居る外はなかつた。それが口上手に知らず顔を作ると云ふことも出来ない人であるから、宮の方からはやはり良人の戀を遮る世間並の嫉妬とよりは見えなかつた。薫の君は浮舟の君が自分をそれ程戀しくはないのかと思ふであらうと、行かないことを心苦しく思ひ遣つて居ながら、もう何事をするにも自身を軽くする事の出来ない大官になつて居るので、何か行くのに理由がなくては、宇治へも行けないのであつた。併しもう其内には京へ呼んで妻の一人としての體面を保たせる待遇をしようと思つて、薫の君は思つて居た。宇治へ行つた時の遺瀨ない心の慰めにと、思つて妻りもした妻なのであるから、當分は山莊にも置いて置いて、何か一日二日滞留するのが當然なやうな口實を拵へては行くやうにして居たい。そして暫く時間が経つた時に、初めは目立たない風にして京へ移らせた。いそしたら俄なことをしたやうに世間を騒すこ

ともなくて済むと薫の君は思ふのであつた。それに二條院の女王に對しても浮舟の君さへ我物にすれば宇治などには用もないやうにして見せるのは本意でないからと思つて他日京へ迎へたら毎日でも逢ひたければ逢へるのであるからと戀しいと思ふ心を押へて居た。何にしても戀をするのに餘りのんき過ぎる心の人であるには違ひない。薫の君は浮舟の君を迎へて住ませる所を決めて家を造らせにかかつて居た。薫の君は今もやつぱり二條院の女王に盡すことを忘れない人であつた。女王も年が行つて來るに随つてこの人の親切をしみじみ噛み分けることも出来るやうになつて嬉しく思はないでは居られなかつた。宮が餘り頼みがひない薄情なお心に見える時恨めしい時などには運命と云ふものは人の儘にはならないものである。姉の女王が自分のことを心配して薫の君の妻にさせようとしたのがさうはなつて居すに、こんな苦勞の多い結婚をする身體になつたなどと女王は

思つた。併し薫の君に逢つて話などをすることはだんだんむつかしくなつて來て居た。山莊時代の八の宮家のことをよく知らない者が女達にも次第に出來て來て居るのであるから濃い身内でもない異性の親しい交際を怪しく思つたりするものもあるであらうと女王は心が置かれるからであつた。それに宮が絶えず疑ひの目を二人の上に放つておいでになるので、それが又憚られもして、自然に外に現はれる女王の態度は疎疎しいものになつて行くが、心はその反對に薫の君を親しくなつかしい人と昔にも勝つて思つて居た。多情な宮のお心だけは何時も女王に恨めしかつたが、若様の美しく成人して來るのをお見になつて外には自分の子と云ふものを持つ因縁のある女もないのであらうと思ひになつて女王を大切に思ふお心も増しなつかしい妻としてお愛しになることも誰より勝つて居たから、女王は宮が六の君をお妻りになつた當座よりは物思ひが少くもなつて居た。正月

の二日三日の頃二條院へお歸りになつて、若様の年が一つ殖えたと云つてお嬉しさに相手をして可愛がつておいでになる晝頃に、小さい女の童が緑色の薄様の封皮に包んだ手紙と細いひげを澤山出した玩具の籠を松に附けたのや、白い立文などを抱へるやうにして持つて彼方から走つて來た。女の童がそれを女王の前に置くのを宮が御覽になつて、

「おい、どこから持つて來たのだ。」

とお云ひになつた。

「宇治から來たと申しまして、大輔さんに上げるのだと云つて使がうろうろして居ましたから、何時も宇治からのお手紙は奥様が御覽になるのだと存じましたので、私が貰つて參つたので御座います。」

と童は口早に云つて、また、

「奥様、この籠は金で塗つて御座いますのね、松も眞實のやうに上手に

出來て居りますこと。」

と嬉しさに云ふのであつた。宮もお笑ひになつて、

「ちやあ私も見せて貰はう、お貸し。」

とお云ひになつた。浮舟の君から來た物であるから女王はごうしやうかと苦しく思つた、

「手紙は大輔の所へ持つてお行き。」

と女王は童に云つた。顔色がばつと赤くなつたのを御覽になつて、宮は薫の君からよこした手紙ではないかと云ふお疑ひが起つた。宇治と云はせて來るのも其人の考へつく名であるとお思ひになつて、手紙を宮は手でお取りになつた。さすがにさうであつたら自分はどんな氣がするであらう、自分の戀を呟ふやうなものであつたなら、これを開ける瞬間が自分と妻の間を幾千里の遠さに隔てる瞬間なのであるからとお思ひになると、お開けになるのがお躊躇れにもなるのであつた。

「私が開けて見てもいいの。」

と宮は女王にお云ひになつた。

「何故そんなものが御覧になりたいのでせうね女達同志のやりとりする手紙なんかを。」

と女王は餘り騒がないで云ふので、

「ちやあ、見るよ女同志の手紙と云ふものはどんなことを書くものだらう。」

と云ひながら宮は手紙をおひろげになつた。若若しい手跡で、

あなたにまたお目にかかりたいと思ひながら、それが出来ません。今まで去年は暮れました。山里の家は寂しくて仕方がありません。

なごごこんなことを書いて、端に、

玩具を若様にさし上げて下さい。つまらないものですが。

と添書がしてある。殊に貴人らしい女の字とも見えぬが女達の書く

字のやうでもない。立文の方をお開けになると、これはまがひもない

女の癖の出た字で書いてあつた。

新年の賀を申し上げます。そちら様では御主人様方初めあなた様

にもごんなにおめでたいお悦びが澤山おあり遊ばす正月でせう。

この結構な山荘に置いて頂いて居ますが、姫様は絶えずお寂しさう

でお可愛相で御座います。時時はそちら様へお上りになつたらと

申しますが、あの時の恐さに餘程もう懲りておいでになるやうで、そ

れでお上りにもならないんで御座います。それで居て始終そちら

の奥様を戀しがつておいでになるのです。卵槌を一つ拵へました

からさし上げます。奥様の御覧にならぬ時に一寸若様のお目にか

けて下さいまし。

正月に書く手紙に書くべきでない愁歎めいた文字も使つてある。宮

にはこの二通の手紙を書いた女は誰であるかを一寸御想像が出来な

い。宮は手紙を何度も繰返して読んでおいでになつた。

「誰から来た手紙だか眞實に云つて御覽よ。」

と宮は女王にお云ひになつた。

「昔私の家に居た人の娘が理由があつて此頃宇治の家に行つて居るのですわ。」

と女王は云つた。主従の間柄でもないやうな手紙であるのにと宮はお思ひになるうちに此處へ来て懲りたとあるのは其事であらうと去年の秋の或日の夕をお思ひ合せになつた。卯槌は閑暇にあかして拵へたものと見える。それを附けた枝に祝の歌をも書き附けてあるのを戀しい人の作かとお思ひになる宮はお心を留めて読んでおいでになつた。

「返事を書いておやりよ、悪いぢやないか何も隠さなければならぬ手紙ぢやないのに、あなたは見たのを憤つて居るのだね。私は彼方

へ行つて来る。」

と宮は立つてお行きになつた。女王は前に来て居た少將や右近に、

「宮様にあれを御覽に入れてはいけなかつたのにねえ、小さい子の受取つたのを誰も氣が附かなかつたの。」

と低い聲で云つた。

「私等が存じて居りましたら決してそんな時に宮様にお上げしたり致すものぢや御座いません。一たいこの子は子供らしくない子な

んで御座いますよ、生意氣なんで御座います。大きくなつてもこせこせした人にしかなれないんで御座いますよ、こんなのでは。」

少將は童の方を見ながら云つた。

「そんなに小さい人に憤るものぢやないよ。」

と女王は云つた。去年の冬人が伴れて来た子で、美くしい顔をして居るから宮も可愛がつておいでになるのである。宮は御自身のお居間

へお入りになつて不思議なことを發見して來たと思つておいでになる。宇治へ右大將の行くことは今に絶えないと聞いたが、夜も泊つて來ることがあると云ふことは、いかに故人が戀しいと云つても餘りな事だと思つたが、さういふ女が隠されて居たのであつたかと宮はお點頭かれになることもおありになつた。宮は大内記で右大將の家のことをよく知つて居る家來をお呼びになつた。其大内記に書物の名をお云ひになつて或物をお手近の棚へ積み變へさせたりする用をおさせになりながら、

「右大將は今でもちよくちよく宇治へ行くのかね、立派な寺を建てたと云ふことだが、一度行つて見たいものだ。」

「御堂は大したものので御座います。宇治へお行きになりますことは、去年の秋頃から前よりも烈しくおなりになつた様で御座います。」

あちらの侍の申して居るのを聞きますと、奥様を一人宇治にお置きになつて居る相で御座います。並に思つていらつしやるのでは御座いますまい。右大將家の宇治の領地、預所の侍などは皆其奥様の御用をするやうにとお決めになつたさうで、代る代る泊り番に其處から侍が行くやうなこともおさせになるさうで御座います。幸福者で、そしてまたさうした寂しい日送りをしなればならないそんな人があるなどと申して居りましたのは、十二月の初め頃で御座いました。」

と大内記は云つた。御自身の想像通りのことが聞かれたのを宮は嬉しくお思ひになつた。

「右大將はまだ細君の處へ行くと云つて宇治へは行かないのかい。」

「やはり以前から彼處に居ます尼様を訪問においでになると云ふことにしてお行きになるさうで御座います。尼様は廊下横の細座敷

に居まして、其人は新築の御殿に居られるんださうで、綺麗な女達な
んかも大勢使つて見苦しくなく暮して居られるさうで御座います。』
趣味のある面白いことだね。右大將がどうして戀をするやうにな
つた女なんだらう。左大臣などはあの人が餘りの佛信心で、どうか
すると山の寺で夜泊つたりすると云つてはあの人の厭世的な思想
をどうかさせたいと心配して居るが、私はそれは死んだ戀人を追懐
する情から出ること、八の宮の山莊で泊つて來るのだからと思つ
て居たが、皮を何枚か剝いだ下にはそんな事があるんだね。どうだ、
堅い男と云ふ評判を取つた者程そんな事が陰ではあるものぢやな
いか。』
と宮は面白相にお云ひになつた。大内記は右大將家の家令の婿なの
であるから、こんなに薫の君の内證事をも聞き知つて居るのである。
宮のお心の中ではその人を自分の忘れることの出來ない戀人である

と見定めめることはどうしたら出來るであらう、薫の君がそれ程妻らし
くして宇治に住ませてあるのは普通の戀人ではあるまい、それがまた
どうして女王と戀意なのであらうなぞと思つておいでになるのでは
ある。自身から其人が離れて行つて薫の君の妻になつたと云ふことは、
皆女王と薫の君とが心を合して計つたことであるらしくお思はれに
なるのが腹立たしく口惜しいことに宮はお思はれになつた。其のち
の旬の宮は毎日毎日浮舟の君のことについてばかりお心を惱ましてお
いでになつた。一月の諸宴會の多い頃も過ぎて、官吏等が陞叙更任期
が近くなると云つて奔走し歩く頃になつたが、宮はそんな事に關係の
ない御身柄であるから、どうかして宇治の山莊へ行く工夫はないかと
ばかり考へておいでになつた。大内記は此宮に由つて得たいと思ふ
官があるので、今はどんな事でもお心に背くまいとして居る。それを
以前よりも猶一層愛してお使ひになつて居る宮はある時お呼びにな

つて、

「少々むつかしいことでも私の頼むことは聞いてくれるだらうか。」
とお云ひになつた。

「はい。」

と云つたまま大内記は畏まつて居た。

「よくもない事なんだがね、右大將が宇治に置いてある人と云ふのはね、私が前に關係して居た女で、行方が分らなくなつて居たのが、あの人に引き取られて居るのだと云ふことがいふんなことから解つて來たのだが、確かにさうとはまだ決められないんだから、宇治の家へ行つて何かの間からでも覗いて見たいのだ。それを人に知れないやうにして行く工夫をおまへに考へて貰ひたいのだ。どうすればいいだらうねえ。」

と宮はお云ひになつた。大變なことをお云ひ出しになつたと大内記

は思つたが、

「宇治は山路を參るので御座いますから、夕方京をお出になりまして夜の十時頃にお著きになりますで御座いませう。そしてまた夜明頃には京へお歸りになれますでせう。人に知れると申しますことはお供の者の口からなどで御座いますが、併しそんな者が上様の御心中までをかれこれと知つてしまふやうなことはないんで御座いますから宜しう御座います。」

と斯う云ふのであつた。

「道程はそんなものだらう。私は昔も二度や三度は行つたことがあるから知つて居る。路の遠いよりも、私は輕輕しいことをしたと若しそれが世間へ知れた時に批難されるのが厭なんだ。」

と宮は云つておいでになつた。何と云つてもこの事は善くないことである、と宮はお考へにならないのでもないが、もう既に云ひ出したの

であるから實行する外はないとお思ひになるのであつた。お供は昔の山莊通ひにもお隨つて行つた經驗のある男が二三人と上な者はこの内記と宮の乳母をした女の息子の藏人と二人がお隨きして右大將が今日や明日に宇治へ行く氣づかひはないとよく搜つて解つた日に宮は宇治へお出掛になつた。途途宮は昔からよく氣が合つてどんな物事も打明けて秘密にすることを話し合ひもしたり、戀人に手引して逢はせて貰つたりもした其友の妻に自分は愛情の反逆をさせる目的で行くのではないか恥を知らない行爲をする自分であるとお思ひになつて悲しまれるお心の中にお思ひ出しになるのは薫の君が御自身に盡したいろいろの事ばかりであつた。京の中でもこれ程の少ないお供でお歩きになるやうなことはないのである。お服装なども輕い人のやうな風にして、馬でおいでになるのであるから、人通りの少ない道でもあり、不安な心細いお思ひもおしにならないことはないが戀

の上、殊に好奇心を多くお働かせになる宮は、山を深く入つておいでになるに随つて、そんな事よりも浮舟の君の顔をお見になる時の喜びを思つてお心をときめかせたり、また斯うしてまで行きながら假にでも逢ふことが出来なかつたなら、ごんなに味氣ない心地をして歸らなければならぬか知れないと胸を騒がせたり計りしておいでになつた。宮は法性寺の邊まで車で、それから先はこの馬に乗つてお出でになつたのである。お急ぎになつたので十時過ぎに山莊へお著になつた。大内記は山莊の勝手をよく知つた人に聞いて置いたから泊番の侍の居る室のある方の庭へは入つて行かずに、西の方の蘆を垣根にした庭へ垣を少し壊して入つた。さうはしながらも大内記に取つては初めての所であるから、どうかするとまごつきもされるのであるが見廻りの男などがさう度度歩く庭でないから氣安くもあつた。御殿の南側の座敷に灯が薄暗く點いて、中に低い物音のするのを知つた大内

記は宮の待つておいでになる所へ引き返して来た。

「まだ起きて居るやうで御座いますから此處から庭へお入り下さい」と云つて大内記は宮の御案内をして行つた。宮は灯の點つた座敷の縁へそつとお上りになつた。隙間のある所を選んで戸にお身體をお寄せになつたが戸の中の御簾がさらさらと鳴つたのではつとお思ひになつた。新しく美しい普請ではあるが、こんな處柄であるから誰も来て覗く者はあるまいと戸の隙間などは繕ろはせないであるらしい。几帳は皆切れを上へ揚げて掛けてある。灯を明るくして縫物をする女が三四人居た。美しい女の童が絲を繕り合せて居る宮は其女の童の顔にお見覚えがあつた。これは思ひなしかとお思ひになつたがあの時に右近と云ふ名を人に呼ばれて居た若い女も居る。浮舟の君は肱を枕にして横になりながら灯をじつと眺めて居た。髪のかぼれかかつた額の邊りが氣高い艶めかしさに富んで居ることがよく女王

に似て居た。右近は縫物の切れを下に置いて折目を附けながら、「いらつしやいますと一寸またお歸りにくう御座いますね、奥様殿様は少しお暇になつたら朔日頃に必ずお來しになる筈だと昨日のお使の人が申して居りましたが、お手紙にはどうお書きになつてあるので御座いますか、奥様。」

と云つたが浮舟の君は黙つて返事をしなかつた。何だか物思ひに囚はれて居るやうな顔をして居た。

「奥様のお留守に殿様がおいでになると困りますのね。」とまた右近は云つた。

「ですから京のお家へ一寸お行きになることを奥様から殿様へ前にお知らせしてお置き遊ばす方がいいのですよ。それから奥様石山からお歸りになりましたら一日も早く此處へお歸り遊ばせよ、私なんかも此處が氣樂なものですから却つて御實家へ参りましたら

旅の宿屋にでもお供して居る氣がするだらうと思ひます。」
と云ふ者もあつた。

「私に云はせると奥様はおいで遊ばさない方がいんです。當分は
じつとして何時殿様がおいでになつても好いやうに柔順しく待
ておいでになるのが好いやうに思はれますよ。お邸へいよいよお
いでになつた後でお實家のお交際なんかもお初め遊ばした方が
好いのですがねえ奥様。ままさんはあんな人ですから大奥様にお
勧めしてどうしても奥様に石山詣りを早くおさせしないといけな
いなんか申してこんなことが出来て來たので御座いませうよ。」

「眞實にままが京のお家へ行くのは留めるんでしたね年寄と云ふも
のは餘計なことを考へたり云ひたがつたりするものですから厭に
なつてしまふ。」

と云ふのは右近である。宮は女達に憎がられて居るのは乳母らしい

とお思ひになつてあの夕暮に自分のためにも嬉しくなかつたのはそ
の乳母であつたと思ひ出しになるにつけても、その時の光景がまぼ
ろしのやうにお目の前に現はれるのであつた。女達はますますいろ
んなことを云ふ。

「二條院の女王様は眞實にお幸福な方ですわ左大臣様が大騒ぎして
宮様を御自身の方へ引附けやうとなすつても若様がお出来になつ
てからは宮様が女王様をお大事がりになる事が特別でもう女王様
は堅い堅い地盤の上に立つていらつしやるやうなものだと云ひま
すよ。ままさんのやうないらぬお世話やきが女王様のお傍には居
ないので女王様はますます宮様のお氣に入つてお行きになるので
せうよ。」

「殿様さへ初め通りにこれからも奥様のことを思召しにさへなれば
奥様だつて女王様のお幸福にお劣りになるものですか。」

と一人の女が云つた。浮舟の君は少し起き上つて、
『そんなことは云ふものぢやないよ。私はね、餘所の人にこそ誰よりは幸福な者にならうとか何とか思ふけれど、女王様に勝たうなどは夢にも思はない事なんだから、こんな話が女王様の耳に入ると私が困るわ。』

と諭すやうに云つた。宮は女王とこの人はどれ程の身内なのであらうと思つておいでになつた。よく似て居るとお思ひになるのであるが、比較してお思ひになると、女王に見る様な嬋妍な美は此人に少ない。此人は顔の部分の一つ一つが云ひやうもなく愛らしく見えて美しくい。思ひ懸けすお逢ひになつた時にさへも、あれだけ宮のお心を引いた人なのであるから、憧憬れ抜いておいでになつた目の前に其人の居るのを御覧になつては、此儘でお歸りになるお心にはもとよりなれない。いどうかして自身の物にする手段はないかとお心を亂してお出でに

なつた。何處かへ明日にでも行くらしい、實家などと云つて居るから親などもあるらしい。今夜此處で逢はないでは又と云ふ機會は捉へ難いことと思はれる。どうしても今夜のうちに事を運ばなければならぬ。いと宮はもう夢の中の人のやうに御自身を忘れながら、やはりお目は浮舟の君に注ぐことをお忘れにならなかつた。右近が、
『眠いこと、昨夜もよく寝なかつたのですものね、朝早く起きてこれは仕上げますから、今晚はもう寝ませて頂きます。う、ごんなに早くお迎へをあらからおよこしになるにしても、此處へ著くのは晝前になるでせうから。』

と云つて、縫ひさした着物などは几帳に掛けてうたたねのやうに其處へ横になつた。浮舟の君も少し奥へ入つて寝た。右近は何か思ひ出したやうに起きて北の方の座敷へ行つて来たが、直ぐ出て来て浮舟の君の近くへ寝た。女達は眠さうだつたのであるから直ぐ誰も寝入つ

てしまつたやうである。宮は手段と云つても俄かにお思ひ附きになることも出来ない。心を定めて戸をお叩きになつた。右近が、

「ごなた。」

と云つた。宮は咳ばらひをおしになつた。品の好いそのけはひは云ふまでもなく薫の君であると思つて右近は起きて來た。

「早く開けてくれ。」

と宮はお云ひになつた。

「今晚はまあ殿様ごう遊ばしたので御座います、随分遅う御座いませうのに。」

と右近は云つた。

「奥様が何處かへ行くのだとか仲信が云つたから、急に來なければならぬ気がして來たのだけれど、其爲めに非常な目に逢つた。ともかくも早く開けてくれ。」

宮は薫の君の聲を真似てお云ひになつた。それも低く云つておいでになるので、右近の方では人違ひであらうとは思はない。戸が開けられた。

「道で大變な目に逢つて見苦しい風になつたから、灯を暗くしてくれ。」と宮はお云ひになつた。

「まあ。」

と云ひながら右近は燈を物蔭へやつた。

「私を人に見せないやうにしてくれ、私が來たことも皆に知らせないで置く方がいい。」

宮はかうお云ひになつた。お従弟同志でもとから少しは聲に似た處がおありになる上調子迄を上手に似せておいでになつた。恐しい目とは追剝にでも逢つたのではないかと氣の毒に右近は思つて、そつと暗い處から膺の右大將を見た。若い姿の美しい大將はいつものや

うにいい香を散らしながら上着を脱いで浮舟の君の傍へ寝ようとして居た。

「何時ものお床へおいで遊ばしませし。」

と右近は云つたが大將は何も云はずに其儘其處へ寝た。右近は夫婦の上に蒲團を懸けて近くに寝て居た女達を起して少し遠い所へ皆と一緒に居て寝た。大將の供は何時でも領地預所の方へ行つて泊ることになつて居るので賈の大將に供のないことなども何とも女達は思はないのである。

「殿様がいろんな苦痛を忍んでこんな夜更にお来しになつた情のお深いことがよく若い奥様に解るかしら。」

なご云ふ女もあつた。

「夜分はひそびそ話がうるさく聞えるものよ静かになさいよ。」と云ふ者があつて皆聲をひそめた。浮舟の君は氣が附いて見ると傍

に居る人が良人の薫の君ではなかつた。このあさましい事は夢ではないかと思つて居る女に去年の秋のことを云ひ出して、それ以來どんなにこの戀のために心を苦しめて居るか知れないと云ふので、この人が匂の宮でおありになることが女に解つた。女はいよいよ恥しく思つた。女王がどう思ふであらうと思ふと、悲しくて悲しくて留度もなく泣かれる。思ふ事はお遂げになつても、もうこれから後に何等の光明もない戀であるとお思はれになるので、宮も泣いておいでになつた。夜は遠慮もなくすんすん明けて行く。お供の人達は庭で咳拂などをして宮をお促ししようとした。右近が起きて来た。宮は歸つてお行きになるお心にはなれない、又来る事も困難なのであるから、自分の居ない爲めに京で騒がれてもいい、今日だけはこの人と一緒に居たい、何事も現在の生を充たして樂むためなのであるから、今この人と別れて行つて死ぬやうな思ひをするのには代へられないとお思ひになつた。

右近を呼んで、

「察しのない者のやうに思ふだらうが私はどうしても今日は歸れない、供の者は近くの所でそつとして今日一日だけ隠れて居れと云つてくれ。時方は京へ歸つて私は山の寺へでも一寸行つて遊んで居るとでもいいやうに云つて置けと云ひつけてくれ。」

とお云ひになつた。右近は大將と信じて居た人が宮でおありになつたので、呆れて氣が遠くなつて行くやうな心持になつて居た。昨夜の自分がした過失の大きいことが途方に暮れた今の心にも痛切に感ぜられる。何ももう取返しのないことである、騒いだからと云つても唯だ宮に無禮者だと思はれる外に何のかひもないことであらう、二條院のあつた場合にも強ひて我物にしようとなさつたのであるから、この二人の斯うおなりになる縁と云ふ物は皆前生から決つた因縁なのであらう、運命がさせてしまつたことであらう、あながち人間の

過失ばかりではあるまいと、かう右近は思つて心を鎮めて居る外はなかつた。

「奥様には今日京からお迎へが参る筈になつて居るので御座います、がそれをどう致したら宜しう御座いませうか。かうおなり遊ばしたことは皆御運命なので御座いませうから私共は決してあなた様をお恨みも致しません。併し今日と申します日はあなた様がおいでになつて入らつしやいますとまことに困りますんで御座います。お志があらつしやいますのならまたそんな折でない時に入らつしやつて下さいませ、お逢はせ致させますでせうから。」

と右近は云つた。物馴れた上手な云ひやうをして自分を歸さうとするのだと宮はお思ひになつた。

「私は長い間仕續けて居た物思ひの後で心がぼけてしまつて居るから、人からごんなに思はれても好いと思つてる。この戀の外に私と

云ふものの生命はないと思つてる。私が少しでも自分の周囲のこ
となんかを考へたら、こんな處へ初めから出掛けて來られはしな
い。迎へが來たら姫様に月のさはりでも俄にあつたこども云つた
ら好いだらう。おまへは私の來て居ると云ふことを私のためにも
姫様のためにも隠すだけのことをすればいいんだ。外の事は何を
云つても私はもう聞かないよ。」

と宮はお云ひになつた。これ程心を引く戀人に出逢つたことがない
とお思ひになつて居る宮であるから、お言葉の通り何物をも放棄する
お心にもなつておいでになるのであらう。右近はお歸りを促す家來
の居る所へ出て行つた。そして宮のお云ひつけ通り、一日何處かに隠
れて居れと云つた後で、

「けれどそれはいけませんとあなた方から申し上げて下さい。こん
なことは宮様がごんなにお云ひ遊ばしても、あなた方がお諫めして、

お伴れ申し上げる筈のものぢやないではありませんか。何故あな
た方はよく考へないで、宮様の御案内なんかしていらつしたので
すか、泊番に來て居る侍衆なんかの目に附いた時に宮様はごんな不
敬なことをおされになつたかも知れなかつたぢやありませんか。」
と右近は云つた。内記は聞いて居るのが辛くて彼方へ行つた。

「時方と云ふのは誰方ですか。」
「私です。」

と時方は答へた。右近は時方は京へ行けとお云ひになつた宮のお言
葉を傳へた。時方は笑ひながら、

「あなたに叱られることが恐いからさうでなくても逃げて行きたか
つたのです。併し戯談はおいて、宮様は實際この戀にお心を苦しめ
られていらつしやるのですから、それをお傍で見居る私等はごん
な悪者になつてもいいと云ふ氣にもなるのです。」

と云つた。

「お泊り番が起きたやうですね。」

時方はまたかう云つてこそそこそと出て行つた。右近は外の女達にこの秘密を見せないやうにするにはどうすれば好いかと胸が騒ぐのである。もう女達は皆起きてしまつた。

「殿様は一寸わけがあつて、今日は人に見られたくない御様子なの。」

私が一寸拜見した處では、道で追剝にでもお逢ひになつたらしいの

よ、お邸からお召を今日の夜分になつてから持つておよこさせになるやうにお供へ私にお云はせになつたのよ。」

なご右近はその朋輩に云つた。

「まあ恐いこと、木幡山と云ふ所は前からそんな所なんですつてね。」

何時も殿様はお供も澤山お伴れにならず、人拂ひもおさせにならな

はねえ。」

と一人の女が云つた。

「餘り大きい聲で云つちやいけませんよ、殿様のお恥だから。皆で氣

を附けて男の方へは一切知れないやうにして下さいよ。」

なごと云ひながらも右近の良心は慄へるのであつた。こんな事を云つて居るのに、薫の君から今日使でも来たなら何事も暴露してしまふであらう、そんな事がなければ好いと思つた。

「初瀬の観音様、今日一日を無事で過ごさせて下さいまし。」

と心の中で祈つて居た。母の中將は今日浮舟の君を迎へて石山の觀音へ參詣させようとして居たのであつた。女達も皆潔齋して行くことを樂みにして居たのであるから、主人の右大將のさうした災難があり、また今日一日滞留されるのであつて見れば、石山行きは廢めになるのであらうと思つて、残念がつて居る者もあつた。日がもう高くなつ

たから右近は此座敷の戸を開けた。浮舟の君の几帳の廻りの用は右近が皆した。中央の間の四方の御簾は皆下して謹慎などと紙に書いて吊したりした。母の中將が自身で迎へに来るかも知れぬと思ふので、これは其時に室の中へ入つて來られなため用の用意である。お手水桶を二つ持つて來たが、宮は薫の君が浮舟の君と寝た朝の常用の其桶を使ふのが口惜しいやうな氣がおしになつた。

「あなた洗つた後の水で私も洗ふよ。」

と云つておいでになつた。女は静かな性情の男である薫の君に思はれて居たのが暫くの間でも別に居ては死ぬと云ふやうな熱烈な言葉も多くお出しになる宮とその人とを比べて見て眞の戀と云ふものはこんなものなのであらうかなと思ふのであつた。それにつけても自分と云ふものは怪しい運命に弄ばれて居る人間であると云ふことが思はれる。此事が世間へ知れた時姉の女王はごう自分を思ふであ

らうかと云ふことが何よりも浮舟の君に苦しかつた。

「あなたは一體誰の子なんだ。眞實のことをお云ひよ。ごんなつまいらない人の子だつても私はいよいよあなたを愛するから。」

と宮はお云ひになるのであるが、この答へだけはごうしても浮舟の君はしなかつた。外の話には愛らしい容子で返辭を云つたりもした。男を慕つて居る女と見られるのが宮はお嬉しくて可愛く計りお思はれになつた。其内に迎へが來た。車を二つ牽いて來たのである。馬に乗つた侍達が七八人下男の數も多かつた。其人等がやかましくおしやべりをしながら出て來たのを女達は主人の大將に恥しく思つて見えない處で待てなごと云はせたりして居た。右近はごうしたら好いのかと思つた。大將が來て居るからと云つて斷つては右大將程の人の不在は直ぐ京で知れることであるから、嘘は剝げるに違ひない。しかし外の女達に相談もして居られないので、獨斷で、

昨日からお汚れになりましたので、奥様は御心配していらつしやい
ました處が、また悪い夢をお見になりましたやうで御座いますから
今日一日は是非お慎ませせねばならないかと存じます。返す返す
も石山詣りのお出来にならないことを残念に存じますが、こんなこ
とは何か佛様のお知らせで、若しお行きになつては後悔されること
があるのではないかと思ひます。

こんな斷り手紙を書いた。そして侍達や下男に食事をさせて歸した。
辨の尼にも今日浮舟の君が京へ行くこと云ふ話をしてあつたので、其人
へも中止したことを知らせに人をやつたりした。浮舟の君は何時
も向ひの山を眺めてばかり居るので、寂しさに日の暮れるのが遅いやう
に思はれてならないのが、今日は時間の立つのを苦痛にして居る相手
の人に同化さされたのか知らぬ間に早く日が暮れて行くやうな氣が
した。宮は見ても見ても飽かない女であるとお思ひになつて、ほれば

れとした酔つたやうな心地をこの人から覺えさせられておいでにな
つた。併し浮舟の君の容貌は姉の女王よりは確かに劣つて居るので
ある。美人と云ふ點では盛の花のやうな六の君の傍へも寄れない人
には違ひないのであるが、其二人の妻よりも誰よりも宮はこの人を戀
しくお思ひになるお心から浮舟の君を未だ見たこともない程の美
しい人であるとお感じにもなるのである。女はまた瀟洒とした風采
の薫の君を見てこれ以上の男はないと思つて居たが顔の美しくしさは
宮が勝つておいでなるなどと思ふのであつた。美くしい手で歌を書
いたり上手に繪を描いてお見せになつたりする人に若い女の心は移
つて行くのかも知れない。

『思ひながら私のよう逢ひに來ない時はこれを見て思ひ出して居て
頂戴』

かう云つて宮は美くしい男と女が夜の物を被いて居る處の繪を描い

てお見せになつた。

「何時もかうして居たい。」

と宮のお云ひになるのを聞いて浮舟の君は涙を零した。

世のかぎり變らぬ戀もはかなけれ明日の生命の知り難きため

と紙に書いて女に見せながら、

「私はこんな風に死ぬやうな事ばかり思ふ。思ひ通りな事は少しも出来ないであなたに逢はうとするのにも、これからどんなに苦勞をするかと思ふだけでも身體が續きさうにない。私はあなたが私を捨てて隠れてしまつた儘にして置かないで、何故こんなことにまでしてしまつたのだらう。」

とお云ひになつた。浮舟の君は宮が墨を含ませてお置きになつた筆を取つて、

いのちのみ世に頼まれぬものならば人の心を歎かざらまし

と書いた。自分の戀の變るのがこの人の苦痛なのかと宮はお微笑まれになつた。一層愛すべき女であると思ひになつた。

「あなたはそんな恨みが誰かにあるのだらう。私と一緒にしてくれては厭だ。私はそんなのぢやないから。」

と宮はお云ひになつた。

「あなたは私の苦しがることを態とお聞きになつたりなさいますから、もうお心が變つたのかと思ひましたわ。」

と娘らしい恨みやうを浮舟の君はした。宮が薫の君と何時關係したのかとそれを聞き出さうとお勉めになるからである。宮はそんなことは皆自然に解つて來ることであらうと思つてお出でになりながら、浮舟の君の口から其れが云はせて見たくてならないのであつた。夜になつて京へ行つた時方がまた出て來て右近に逢つた。

「中宮様からお使が參つたりしますのに、宮様がおいでにならないも

のですから左大臣さんもやかましく云つておいでになります。一人ぼつちでお出掛けになる事は誠によくない、宮様だと知らないものからごんな無禮をお受けにならないものでもない、御身分の神聖をお漬しになるやうなことを宮がおしになつてはお世話を申し上げて居る自分の落度になるなんかと仰つしやるのです。東山の或高僧を御訪問においでになつたと云ふやうに私はしておきましたのですが。」

なごと云つて京の消息を傳へた後で、

「女と云ふものは罪の深いものです、ね私のやうな眞面目な男にさへも間接に嘘をお云はせになるんです。」

とまた云つた。

「その女の方様を高僧とお云ひになつたのがいいぢやありませんか、その佛徳で其方はもとより、あなたの嘘を云つた罪も消滅させよう

よ。ねえ眞實にどうして宮様はこんな危いことをなさいますんでせう、私にでも前からその事をそつと云はせてお置き下すつたら、もつと御心配の少い會合をおさせしますものをねえ。」

なごと右近は人を外さぬことを云つて居た。右近は宮のお傍へ行つて、時方の云つたことを申し上げた。宮はもとからそんな事はあるであらうと思つておいでになつたのである。

「私は自分の持つてる地位がなかり取れる物なら取つてしまひたい。さうした遠慮は何もなくなるからね、少將とか中將とか云はれて暫く居たい。その位の人だつたらあなたと戀をするのに斯うまで人を恐れて居るかしら。さうぢやないだらうと思ふね。實際私としてこれは出來た所作ぢやないんだ、身體が變へたい。私がこんな事をしたと解つたら大將はごう思ふだらう、身内だからとは云つても全く美しい友情で交つて居たのだからねえ。それから私は

こんな事も心配だ大將はあなたをこんな處へ置放しにして餘り出ても来ないためにこんな事もあつたのだから大將の罪でもあるのに大將はそんな事は棚へ上げてあなたを責めるだらうと思ふからねえ誰も全く氣が附かない所へ私はあなたを隠して伴れて行かうと思ふ。そして私が始終其處へ行つて居よう。」

こんな事を宮は女にお云ひになつた。もう一日とは到底おいでになることが出来ないから夜明にはお歸りになる筈であつた。魂を女の袖の中へ残して行くやうな氣が宮はおしになつて居るのであらう。お供の人がもう咳拂ひなどをする。宮は妻戸の所まで女を伴れておいでになつた。

「私の目は京まで何も見られないだらう涙が止まるまいからねえこの戀のために心も暗がりになつて居るのだけけれど。」
と宮はお云ひになつた。女もお別れするのがまことに悲しく思はれ

る様であつた。外には風が音荒く吹いて居た。霜も眞白に地に降りて居た。宮は馬にお乗りになつたがお心はもう一度浮舟の君の傍へお行きになりたくてならない。家來は遮二無二馬を引出してしまつた。山道の間は大内記と時方が兩方から馬の介錯をして歩いた。木幡山を出た時から二人は馬に乗つた。加茂川の汀の土の氷つた所を踏む馬の足音も心細くお思はれになつた。昔もこの宇治と京との間だけは戀の往來にお通りになつた道であるからよくよく因縁のある道であると宮は思つておいでになつた。二條院へお入りになつた。女王が浮舟の君のことを飽く迄隠して居たことを恨めしく思つておいでになる宮は西御殿へお行きにならずに正殿の居間でお休みになつたが何だかお寝附きにはなれない寂しさが物思ひを一層多くさせるやうにお感じになるのでやはり女王の傍へ行つて慰めを得ようと思ふお心になつた。何も知らない女王は美しい顔をして居た。美